

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第115集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(昭和61年度分)

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(昭和61年度分)

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

序

昭和61年度の発掘調査事業は、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、岩手県・建設省・日本道路公団・久慈市・宗教法人毛越寺から委託を受けた14遺跡、78,000㎡余りの調査を実施してまいりました。

発掘調査遺跡からは、縄文時代の集落跡や狩場跡、奈良時代・平安時代の集落跡、室町時代から江戸時代にかけての建物跡・井戸跡など、各時代に及ぶ多くの遺構と遺物が発見されております。

ことにも馬立Ⅰ遺跡の縄文時代早期から弥生時代にかけての住居跡、馬立Ⅱ遺跡における縄文時代後期の狩猟文壺形土器、高所に立地する青ノ久保遺跡の奈良・平安時代の住居跡、駒焼場遺跡の大溝跡、笹間館跡の建物跡や中世の陶磁器などが注目されるところです。

発掘調査略報は、各遺跡の調査報告書刊行に先だち、これら14遺跡の調査結果の概要を収録したものであります。本書が研究者のみならず、多くのかたがたに活用され、埋蔵文化財への御理解を一層深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査事業をすすめるにあたり、御援助と御協力を賜りました委託者をはじめ、地元教育委員会等関係各位に対し、心から感謝を申し上げます。

昭和61年12月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 中村 直

目 次

I 岩手県関係

- (1) 大堤 II 遺跡(軽米町) 3
- (2) 笹間館跡(花巻市) 9

II 建設省関係

- (1) 駒焼場遺跡(二戸市)23

III 日本道路公団関係

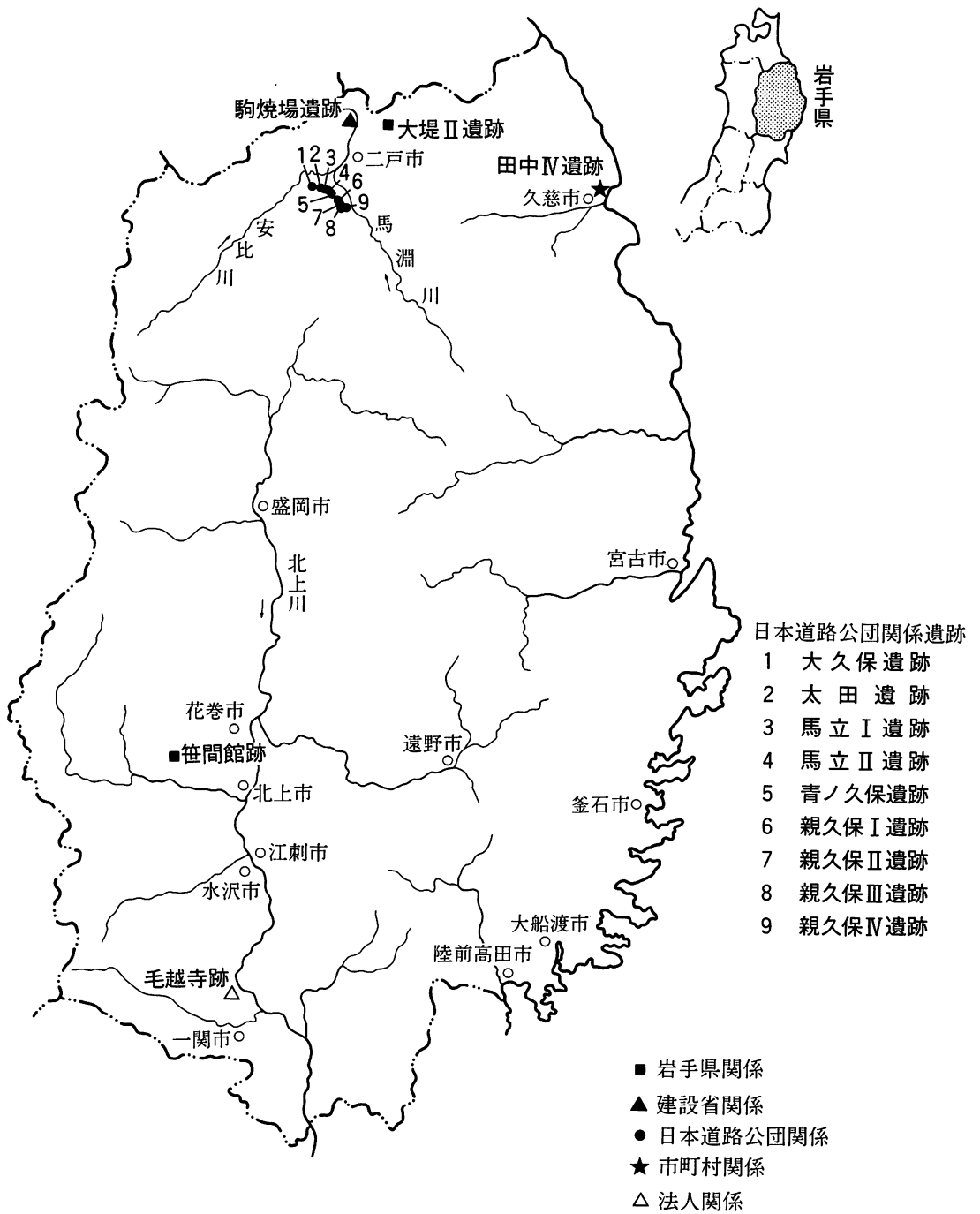
- (1) 大久保遺跡(二戸市)33
- (2) 太田遺跡(二戸市)41
- (3) 馬立 I 遺跡(二戸市)45
- (4) 馬立 II 遺跡(二戸市)53
- (5) 青ノ久保遺跡(二戸市)61
- (6) 親久保 I 遺跡(一戸町)69
- (7) 親久保 II 遺跡(一戸町)75
- (8) 親久保 III 遺跡(一戸町)85
- (9) 親久保 IV 遺跡(一戸町)93

IV 市町村関係

- (1) 田中 IV 遺跡(久慈市)99

V 法人関係

- (1) 毛越寺跡(平泉町) 107

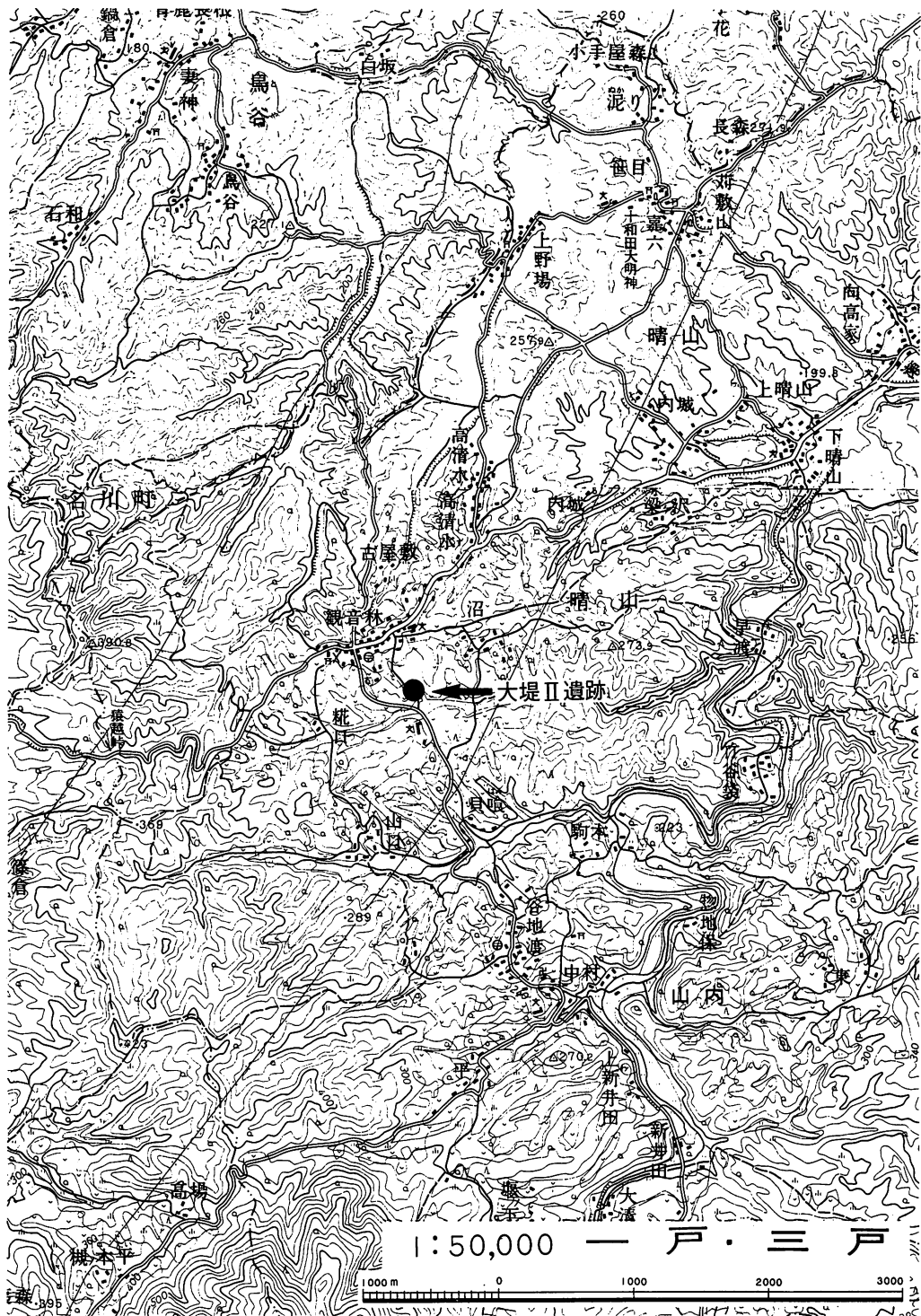


昭和61年度調査遺跡位置図

I 岩手県関係

(1) ^{おお づつみ}大 堤 II 遺 跡

所 在 地 九戸郡軽米町晴山字大堤31-2ほか
委 託 者 岩手県土木部 二戸土木事務所
発掘調査期間 昭和61年6月2日～9月9日
調査対象面積 6,000㎡
発掘調査面積 6,000㎡
遺跡番号・略号 I F 81-0248・O T II-86
調査担当者 平井 進・玉川英喜
協力機関 軽米町教育委員会



大堤Ⅱ遺跡位置図

1. 遺跡の立地

大堤Ⅱ遺跡は軽米町役場の西約6.7kmに位置する。標高260～230mの起伏の少ない丘陵地に立地し、現状は畑地と山林である。

2. 調査の概要

調査は国道340号の改良工事に伴い、町道観音林・前谷地線を挟んだ東西約230m、南北約150mを対象にして実施したものである。

町道や農道により、調査区を西から順にA、B、Cの3区に区分した。A区からは若干の遺物が出土したのみで、遺構は検出されなかった。B区は低い尾根の部分であり、尾根の頂部から東斜面にはピット群が検出された。B区の尾根の裾周辺と東側のC区からは陥し穴状遺構が検出された。

<ピット>

ピットは合計20基である。断面形によって、皿状、ビーカー状、フラスコ状の3種類に分けられる。埋土に十和田a降下火山灰が大量に混入する2基（皿状1、ビーカー状1）及び若干混入する1基の計3基が平安時代に属し、他の17基は縄文時代に属する。概して、縄文時代の皿状ピットは前期に、他は晩期に属すると思われる。

<陥し穴状遺構>

陥し穴状遺構は合計17基である。溝状と円筒状の2種類に分けられる。溝状のものは2基で縄文時代中期以降に、円筒状の15基は縄文時代前期に属する。

<出土遺物>

出土遺物は、石器、縄文土器、土師器、陶磁器、古銭である。いずれも数量は少ない。遺構内から出土した遺物は石器2点と大部分の縄文土器である。他は遺構外から出土したものである。陶磁器はすべて表採である。

3. まとめ

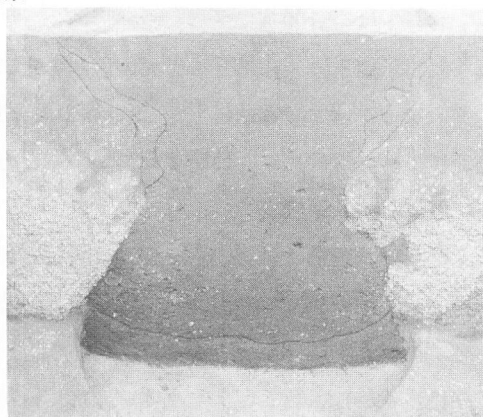
縄文時代前期には狩場の一部として、縄文時代晩期と平安時代後葉には食料貯蔵域として利用されていたと思われる。



遺跡全景



円筒状陥し穴状遺構

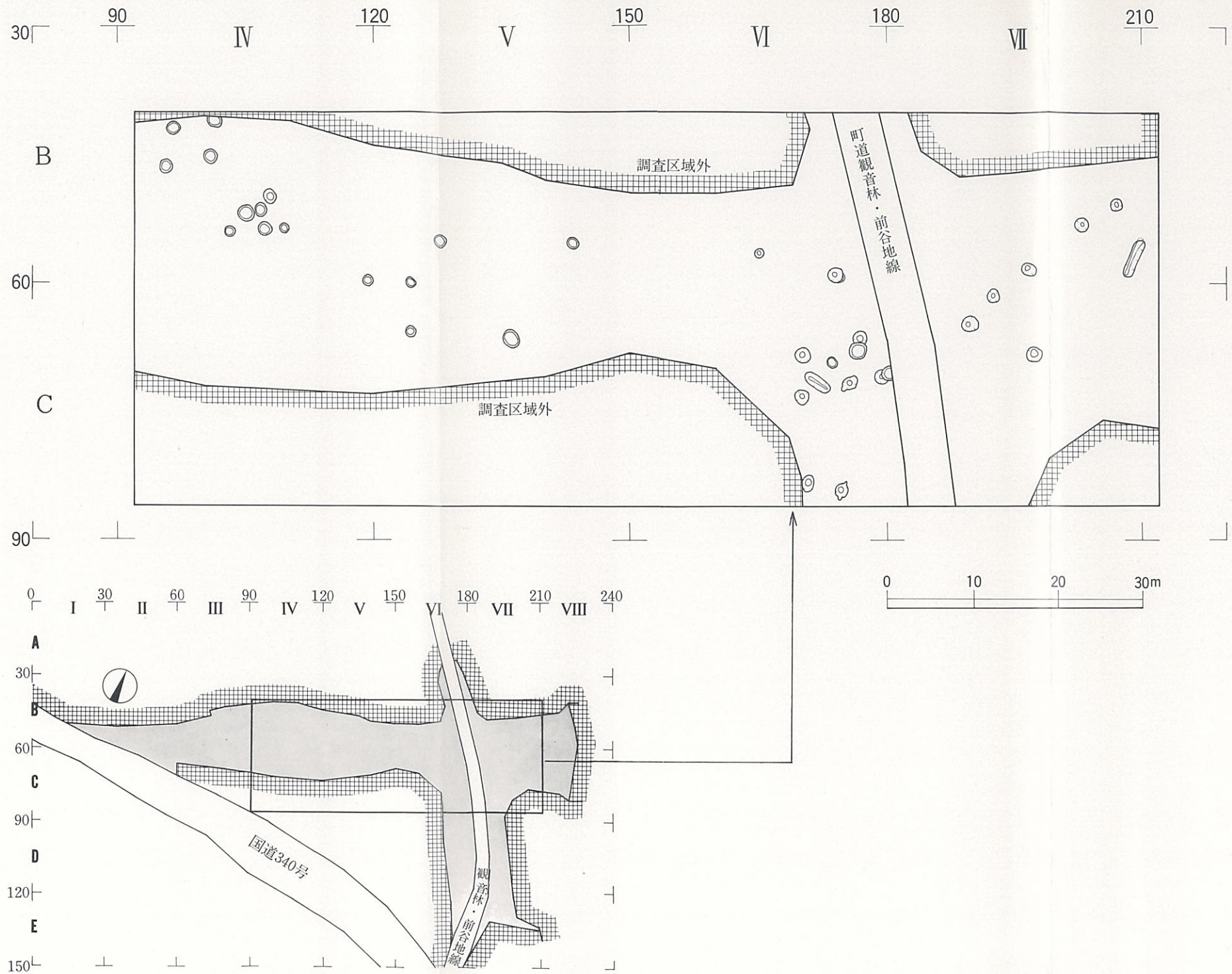


フラスコ状ピット



写真図版 1

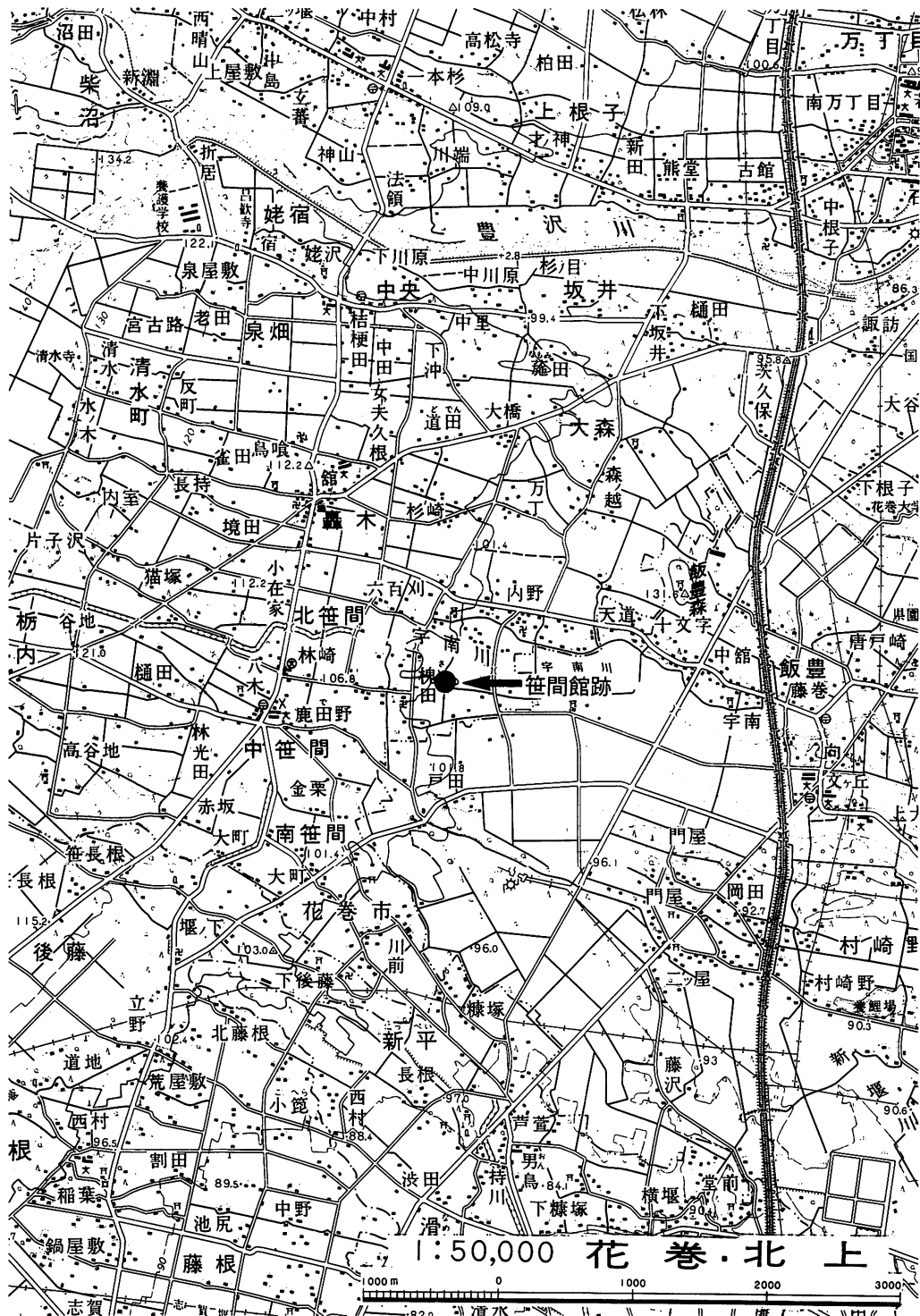
大堤Ⅱ遺跡遺構・出土遺物



大堤Ⅱ遺跡遺構配置図

(2) ささ ま だて 笹間館跡

所在地 花巻市北笹間6—60ほか
委託者 岩手県農政部 花巻土地改良事業所
発掘調査期間 昭和61年4月7日～9月30日
調査対象面積 15,000㎡
発掘調査面積 15,000㎡
遺跡番号・略号 ME45—0050・SMD—86
調査担当者 高橋与右エ門・田村壮一・佐々木嘉直
協力機関 花巻市教育委員会



笹間館跡位置図

1. 遺跡の位置と立地

国鉄東北本線花巻駅の南西約7kmに位置する。館跡は、東へ舌状に張り出す洪積低位段丘の先端部に立地し、北側150mに宇南川、南40mを寺田堰が東流する。遺跡の現状は水田であるが、昭和30年代後半までは畑で館畑と呼ばれた。遺跡の標高は100mほどであり、周囲より2～3m高い。

2. 調査の概要

調査は、水田圃場整備事業に係る東西185m、南北最大90m、15,000㎡の面積を対象として実施した。館跡の現状は、周囲を堀に囲まれた2つの郭が東西に連なる平城であるが、かつてはさらに南側に2つの郭が存在し、本来は4つの郭で構成される複郭型の城館と推測される。

各郭の規模と形状をみると、東館は東西88m、南北64～83m、面積5,900㎡の台形状をなし、南西端に張り出しがある。西館は東西90m、南北60～95m、面積7,000㎡の方形をなすが、西端1,000㎡ほどは削平を受け失われている。南側にあった郭のうち、東の郭は東西120m、南北55m、面積7,200㎡、西の郭は東西40m、南北40m、面積1,500㎡位の規模と推定されるが、昭和20年代までに失われた。

検出遺構は、掘立柱建物跡19棟を含む柱穴約10,000個、井戸跡8基、土坑203基、堀跡6条を含む溝跡23条、周溝遺構18基、竪穴住居跡3棟、カマド跡3基、塚1基、土橋1箇所、不整形の落ち込み数箇所など城館に伴う遺構のほか、縄文時代の陥し穴状遺構71基と土坑16基がある。また、城館に伴うと思われる土坑のうち、完形の土師器や須恵器の坏が出土しており、平安時代の土坑を含む可能性がある。城館に伴う遺物には、陶磁器440点、貨幣530点を含む金属製品580点、石製品174点、木製品40点、炭化穀類があり、他に平安時代の土師器と須恵器、縄文時代の土器と石器がある。

<柱穴と掘立柱建物跡>

柱穴の10,000個は東館6,000個、西館4,000個に分かれ、これらの柱穴から東館に9棟、西館に10棟の建物跡が確認された。東館では、土塁が存在したらしい南辺部と埋め戻した堀の北側を除いた全域に散在するが、特に中央部に密集する。建物跡は梁行1間・桁行3間の小規模なものから、3間×5間に四面庇のつく建物跡等がある。棟方向には南北棟と東西棟があり、南側と北側に東西に並ぶ傾向がある。また、西辺北端に4個の柱穴が対をなす門跡がある。

西館の柱穴は、西側を除く三方が削平を受けて少なく、また南・北辺に全く遺存せず、他は東方に寄るほど少い。しかし、削平以前は西側と同じ様相と推測される。建物跡は、梁行1間・桁行2間の小規模な建物から、2間×6間の建物まで種々あり、東西や南北に棟方向をもって東西両側に並列する。また、東辺のほぼ中央に位置する土橋と相対する位置には、4個と2個の柱穴が対をなす2基の門跡がある。

<井戸跡>

東館に3基、西館に5基があり、いずれも地山井筒の素掘井戸である。開口部径1.5～2m、深さ1～3.2mの規模をもち、7基の形状は開口部、底部ともに円形であるが、西館西端の1基は開口部が円形で底部は方形を示す。東館南東部の1基と西館西端の2基以外は人為的に埋め戻されていることから、廃城期に使用されていたのはこの3基と推定される。

<土坑>

東館104基、西館99基に分かれ、開口部が円形・楕円形・長方形・方形・不整形などの形状を示し、径1～5m、深さ10～50cmの規模をもち、両館とも周辺部に偏在する傾向はみられるものの、分布・規模・形状ともに規則性がみられない。埋土は埋め戻された例も多いが、性格は不明である。

<溝跡>

東館18条、西館5条に分かれ、この中に東館で検出された堀跡6条、柵列跡と考えられる東館の3条と西館の4条、東館に10条と西館に1条ある性格不明の溝跡等を含む。東館で検出された堀跡には東西方向3条、南北方向3条があり、いずれも人為的に埋め戻されている。

<周溝遺構>

18基が検出された。いずれも西館西端に位置し、すべて整地層を除去した地山面で検出された。幅30cm、深さ5～10cmの溝が径3～3.5mの円形を示すように巡る。共伴する遺物がなく、性格は不明である。

<竪穴住居跡>

東館2棟、西館1棟に分かれ、平面形は長方形と方形の2型がある。長方形型が7.5m×4mと4.2m×3m、正方形型が2.5m×2.5mの規模をもち、後者が小規模である。また、東館にある長方形型は東西方向に長軸をもち、西壁に1m位の方形の張り出しがつく。

<カマド跡>

いずれも東館の東端部寄りで検出されている。楕円形状の浅い掘り込みと、底面の焼成面の存在からカマド跡としたが、削平によって遺存状態は不良である。

<塚>

西館の北西隅に存在した。地元では「タテモリ」と呼ばれ、基底部が楕円形を示す6.5m×5.5m、高さ1.5mの規模をもち、封土は人為的な版築状の積土であったが、主体部と推定される部分は検出されなかった。

<土橋・内堀>

東館と西館を境する内堀に土橋があり、東・西両館のほぼ中軸線上に位置する。全長11mであるが、東館寄り3.5mは地山削り出し、その西側7.5mは盛土によって構築される。

土橋の架かる内堀は、上幅11m、底幅7m、深さ3mであるが、東館寄りの2mは深さ2m

位と浅くなっていることから、改修があったものと推定される。

<陶磁器>

440点の出土であるが、個体数では377点となり、貨幣に次ぐ出土点数である。377点は国産陶器135点の35.8%、中国産陶磁器242点の64.2%に分けられる。さらに、国産陶器は瀬戸・美濃系の灰釉63点、同系鉄釉27点、唐津系8点、東海系16点、信楽系3点、瓦質陶器2点、須恵質陶器2点、カワラケ10点、その他4点に分けられる。瀬戸・美濃系には碗・深皿・三足盤・小皿・卸し皿・香炉・壺・花瓶・瓶子・天目茶碗などの器種があり、唐津系には碗と皿が含まれる。そのほか大型容器の甕類と、若干の火鉢・花盆・播鉢・皿などがある。中国産陶磁器では、青磁が最も多く114点、次いで染付68点、白磁53点、鉄釉7点である。器種には碗・皿・盤・壺・水注・小杯・香炉・四耳壺・天目茶碗等が含まれる。

<金属製品>

貨幣530点のうち470点は、東館南東部の整地層の上面を僅かに掘り窪め、その中に三縉^{まし}を横に並べ、その上にさらに二縉を積み上げた状態で出土した。すべて中国渡来銭で、唐代の開元通寶から明代の永樂通寶まで含まれる。貨幣以外では鶴の鑄造品を含む銅製品5点、鉄製品44点がある。鉄製品の器種は銹化によって不明なものが多い。

<石製品>

砥石84点、石臼19点、硯14点、石鉢12点。その他61点があり、砥石以外は全て破片である。石臼には茶臼と穀臼があり、硯には手製の劣悪品と浮彫り文様のある優品がある。

<木製品>

漆塗りの碗や皿3点、下駄4点、曲物4点、折敷・筥・曲物の底板、弧槌、箸各1点のほか、加工材等が出土している。下駄にはさし歯の高下駄、とも歯のものが含まれる。

<炭化穀類>

遺構の内外10数地点から、米・小豆・そば粒が出土している。出土量は炭化米が最も多い。

3. まとめ

遺構は相互に重複し東・西館とも整地層があることや、草木灰や炭化物によって広く被われることから、遺構に数期の変遷があると推測される。出土数の多い陶磁器や貨幣の所属時期から考えて、15～16世紀に位置づけられる城館跡と推定される。

当地域は旧和賀郡に属し、鎌倉時代以降和賀氏の所領とされ、その状況は豊臣秀吉の奥州仕置が行われた16世紀末まで変化がなかったことから考えると、笹間館も和賀氏に関連する人物によって構築されたといえよう。



笹間館跡全体図



笹間館跡 西館遺構配置図



笹間館跡 東館遺構配置図



完掘後全景（西から）



土橋と西館の門跡



西館の建物跡

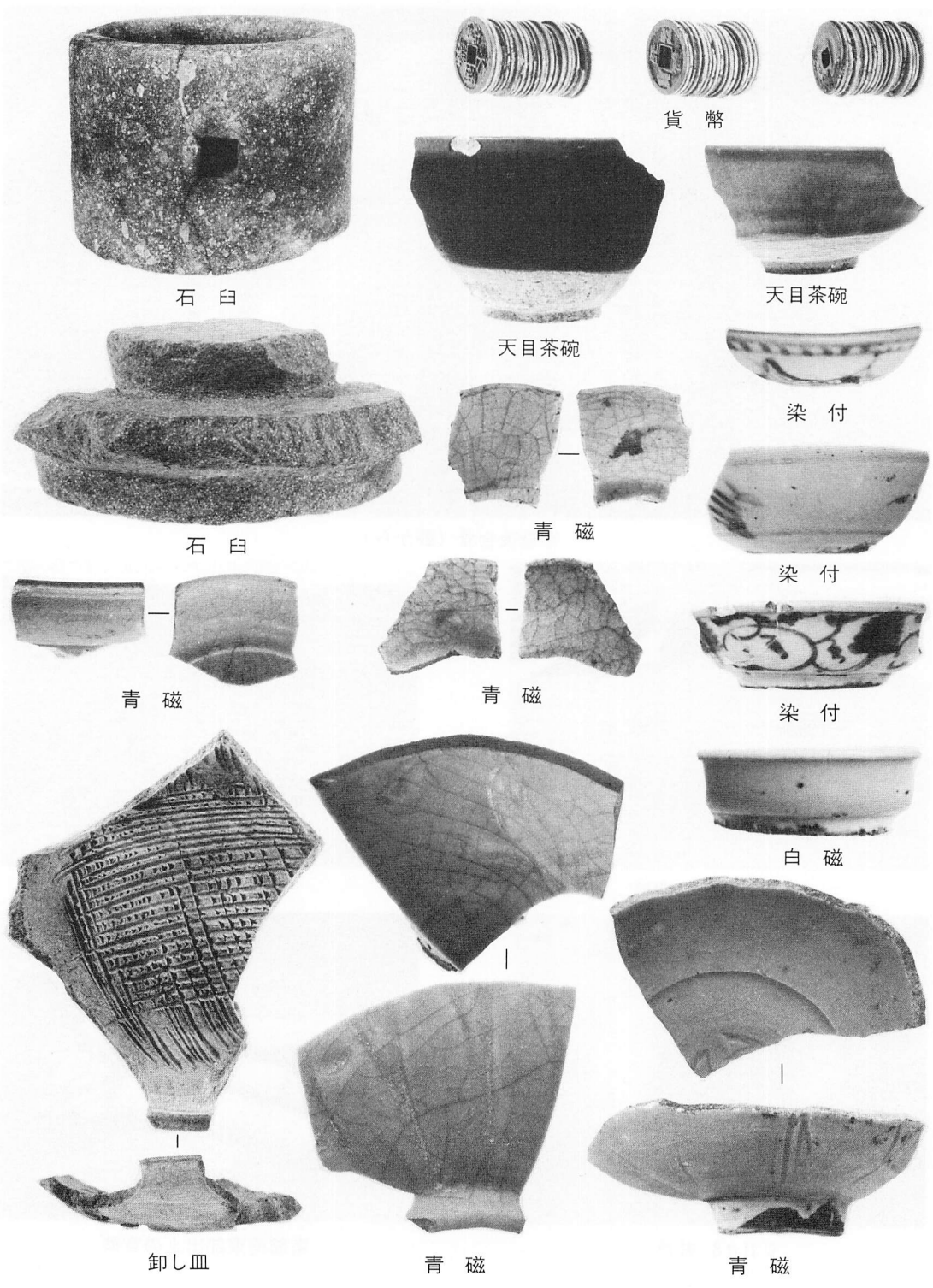


C II d 8 井戸



東館南東部出土の貨幣

写真図版2 笹間館跡遺構

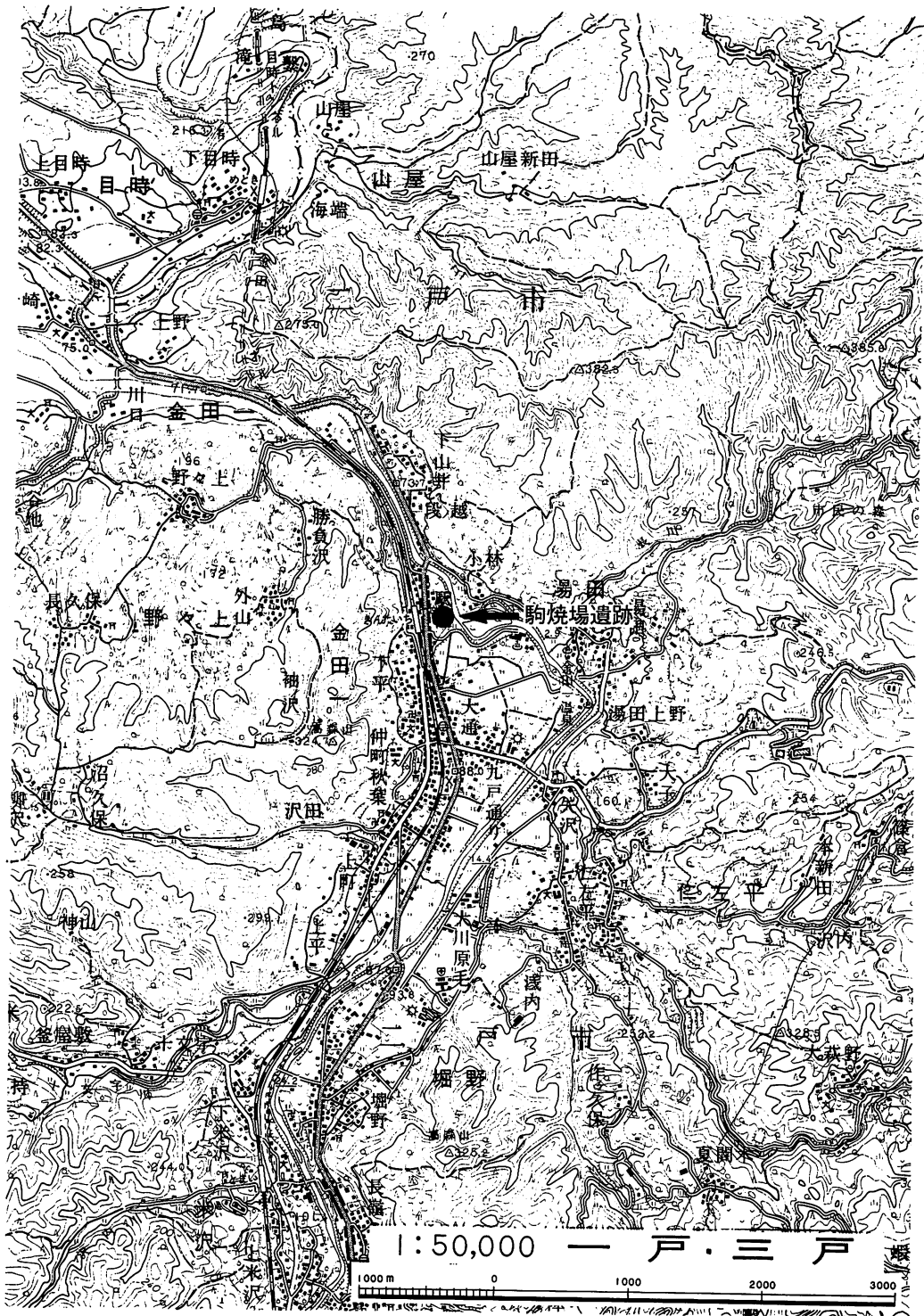


写真図版3 笹間館跡出土遺物

II 建設省關係

(1) 駒^{こま}焼^{やき}場^ば遺跡

所在地 二戸市金田一字駒焼場12-2ほか
委託者 建設省東北地方建設局 岩手工事事務所
発掘調査期間 昭和61年8月1日～10月31日
調査対象面積 1,370㎡
発掘調査面積 1,370㎡
遺跡番号・略号 I F 80—0024・K Y—86
調査担当者 光井文行・中川重紀
協力機関 二戸市教育委員会



駒焼場遺跡位置図

1. 遺跡の立地

駒焼場遺跡は国鉄東北本線金田一温泉駅の東約200mに位置し、馬淵川左岸の堀野段丘相当の沖積段丘縁辺部に立地している。標高は81～83m、馬淵川との比高は12～14mである。遺跡の現況は宅地、畑地、保育園跡地である。馬淵川と段丘崖の間には小規模な水田が作られている。

当遺跡は、昭和57年度に発掘調査した府金橋遺跡の南側にあたる。

2. 調査の概要

発掘調査は、国道4号金田一バイパスの建設に伴い、東西約30m、南北90mを対象として実施した緊急発掘調査である。

検出された遺構は、竪穴住居跡20棟（奈良時代2、平安時代18）、大溝跡5条、土坑45基、墓壇2基、方形周溝跡1基、柱穴群等である。遺物は竪穴住居跡・大溝跡から土師器、須恵器、轆の羽口、土製・鉄製の紡錘車、鉄鏃、鉄製の鈴、刀子、直刀、鎌、鉄斧、穂摘み具、土坑から砥石、遺構内外から縄文時代後・晩期の土器片が少量出土している。

<竪穴住居跡>

奈良時代の竪穴住居跡2棟は平安時代の大溝跡や竪穴住居跡に切られ、形状、規模、カマドの位置などは不明である。埋土の上位には十和田a降下火山灰が皿状に堆積している。1棟からロクロ不使用の土師器甕・内黒の丸底坏のほか、土製の紡錘車が出土している。

平安時代の竪穴住居跡18棟のうち、11棟は平安時代の大溝跡に切られ、4棟が大溝跡を切る。全体の形状や規模が把握できる住居跡は4棟である。長方形をなす2棟は5.4×4m、5.1×4.3m、方形をなす2棟は一辺が3.5m、4mである。最大の住居跡は南東壁の長さが6.9m、最小の住居跡は南西壁の長さが3.1mを測る。壁高は1棟が60cm、そのほかは5～30cmである。カマドは7棟に確認され、位置は南壁中央部東寄りに2棟、南壁中央部西寄りに2棟、東壁中央部北寄りに1棟、東壁中央部南寄りに2棟である。大溝跡より古い住居跡は南壁、新しい住居跡は東壁に設けられる傾向がある。大溝跡より新しく重複する住居跡2棟の新旧関係は、東壁の中央部北寄りにカマドをもつ住居跡が東壁中央部南寄りにカマドを設けている住居跡を切っている。東カマドの1棟は壁から60cm離れた内側に設けている。3棟のカマドでは長さ50～60cm、幅25～30cm、厚さ5～10cmの扁平な凝灰岩2個を継いで袖の芯とし、シルトによって構築されている。埋土には十和田a降下火山灰をブロック状に含むものとほとんど含まないものがある。遺物は大半がロクロ不使用の土師器甕であり、僅かにロクロ使用の内黒土師器坏や須恵器壺が含まれる。そのほか鎌1点、鉄鏃3点、穂摘み具1点等が出土している。

<土坑>

平安時代の土坑は円形をなす15基、隅丸長方形をなす3基、方形をなす1基である。円形の

土坑は径1～1.4mと径1.7～2.2mとに分けられる。前者には平安時代の竪穴住居跡や大溝跡を切る土坑があり、砥石が出土している。後者には大溝跡に切られている土坑があり、埋土には十和田a降下火山灰がブロック状に混じり、壁のオーバーハングするものが多い。長方形の土坑は1.2～1.4×2.2mであり、1基には埋土に灰白色火山灰のブロックが混じり、他の1基は大溝跡を切っている。方形の土坑は一辺が1.6m、深さ70cmの規模で平安時代の竪穴住居跡を切っている。埋土最下部から銅製品が出土している。その他の大半の土坑は平安時代より新しいと推定される。

<大溝跡>

4条の大溝跡が4.5～5.5mの間隔をおいて並行して東西に走り、東側で南に湾曲する。南側の大溝跡は幅2.8～3.9m、深さ1.4～1.6m、南から2番目の大溝跡は幅2.6～5m、深さ1.2～2.8mであり、後者には2回以上の改修がある。いずれも断面形はV字形をなし、埋土には十和田a降下火山灰がブロック状に混じる。土師器甕・坏、須恵器壺、甕など平安時代後期の土器が出土している。北側の2条の大溝跡は幅2.4～2.8m、深さ1～1.1mと幅4～5.3m、深さ1.9～2.2mである。断面形は前者が逆台形、後者がV字形をなす。いずれも埋土には人為的に埋め戻された砂が多く堆積する。前者から鉄鏃3点、刀子と直刀各1点が出土している。

<方形周溝跡>

南側の大溝跡を切って検出される。外径8.1～8.2m、溝幅0.8～1.3m、深さ5～10cmである。埋土全体に灰白色火山灰が堆積する。

<墓壇・柱穴群>

墓壇2基のうち1基は一辺50cm、深さ34～38cmの隅丸方形をなし、頭蓋骨が出土している。他の1基は長辺1.1m、短辺0.5m、深さ24cmの長方形をなし、断面形が浅皿状である。埋土中に多くの骨片、底面直上に多量の炭化物が検出されている。

柱穴は調査区の南西部を中心に100個以上が検出されている。大部分は埋土などから中世より新しいものと考えられる。

<出土遺物>

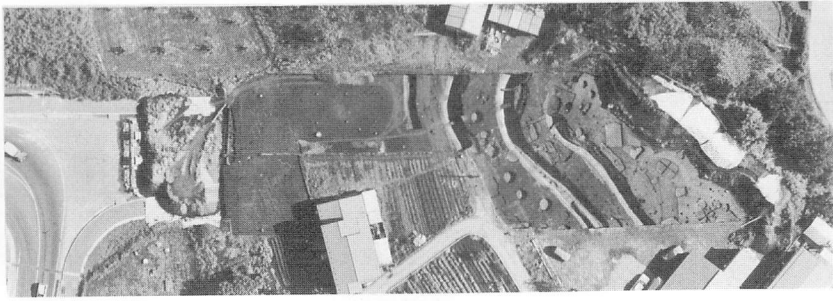
縄文土器、土師器、須恵器があり、主体は土師器甕である。甕はロクロ不使用で、口縁部が短く外反、外傾または内傾する平安時代後期のものが大半を占める。

3. まとめ

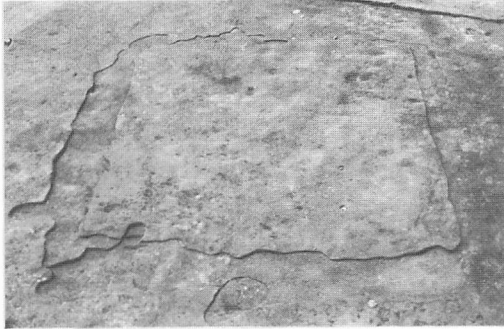
今回の調査によって、大溝跡に切られる平安時代の竪穴住居跡・円形土坑、大溝跡を切る平安時代の竪穴住居跡、さらに大溝跡より新しい平安時代の住居跡が相互に切り合うことなどから、少なくとも4時期の変遷があることがわかり、平安時代後期のムラの変遷、土師器の編年を考える上で重要な資料を得ることができた。



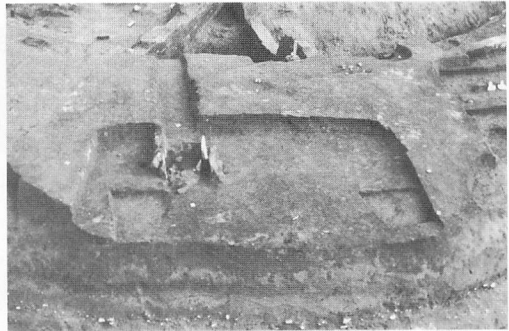
駒焼場遺跡遺構配置図



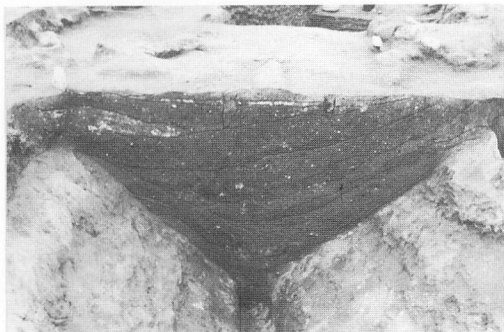
遺跡全景（真上から）



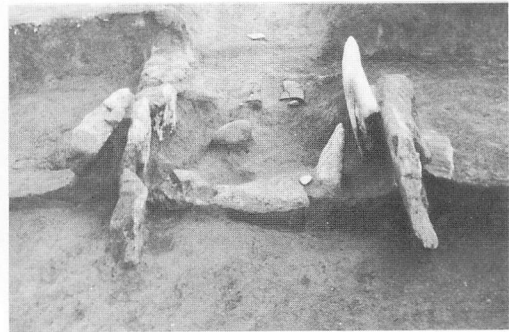
II A-1 方形周溝跡（平安時代）



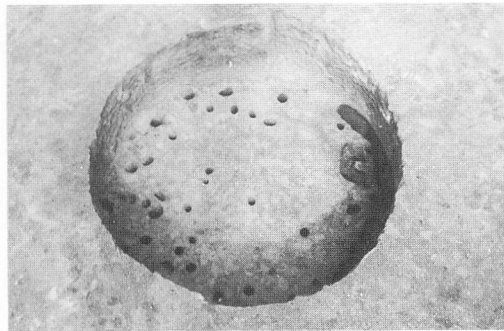
II A-3 住居跡（平安時代）



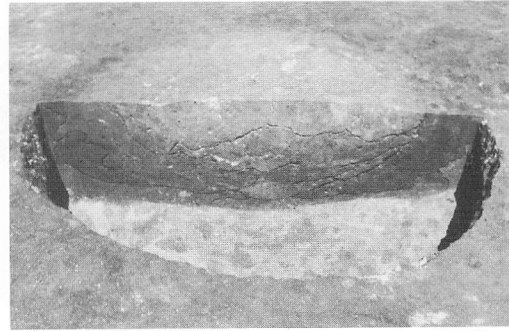
III A-7 住居跡(上)・II A-101 大溝跡埋土断面（平安時代）



II A-3 住居跡 カマド

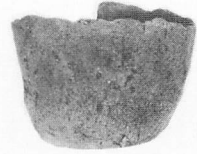
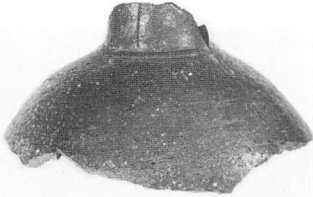
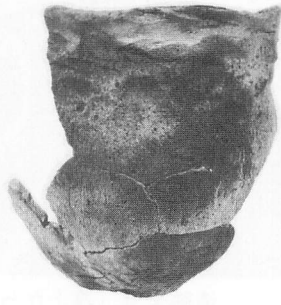


III A-2 土坑（平安時代）



III A-1 土坑埋土断面（平安時代）

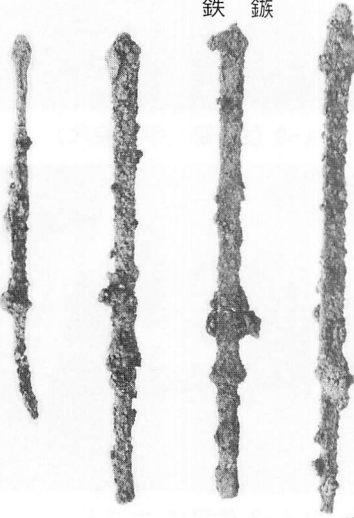
写真図版 4 駒焼場遺跡遺構



須恵器

把手付土器

鉄 鎌



穂摘み具



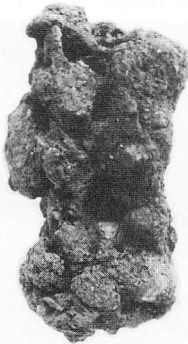
刀子



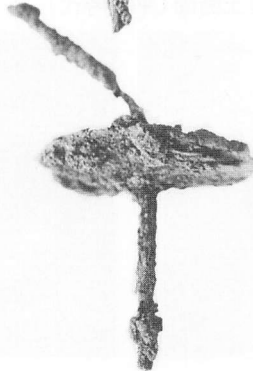
刀子



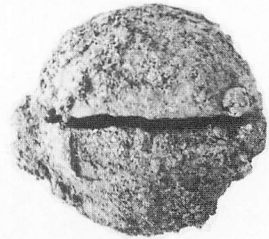
鎌



鉄 斧



紡錘車



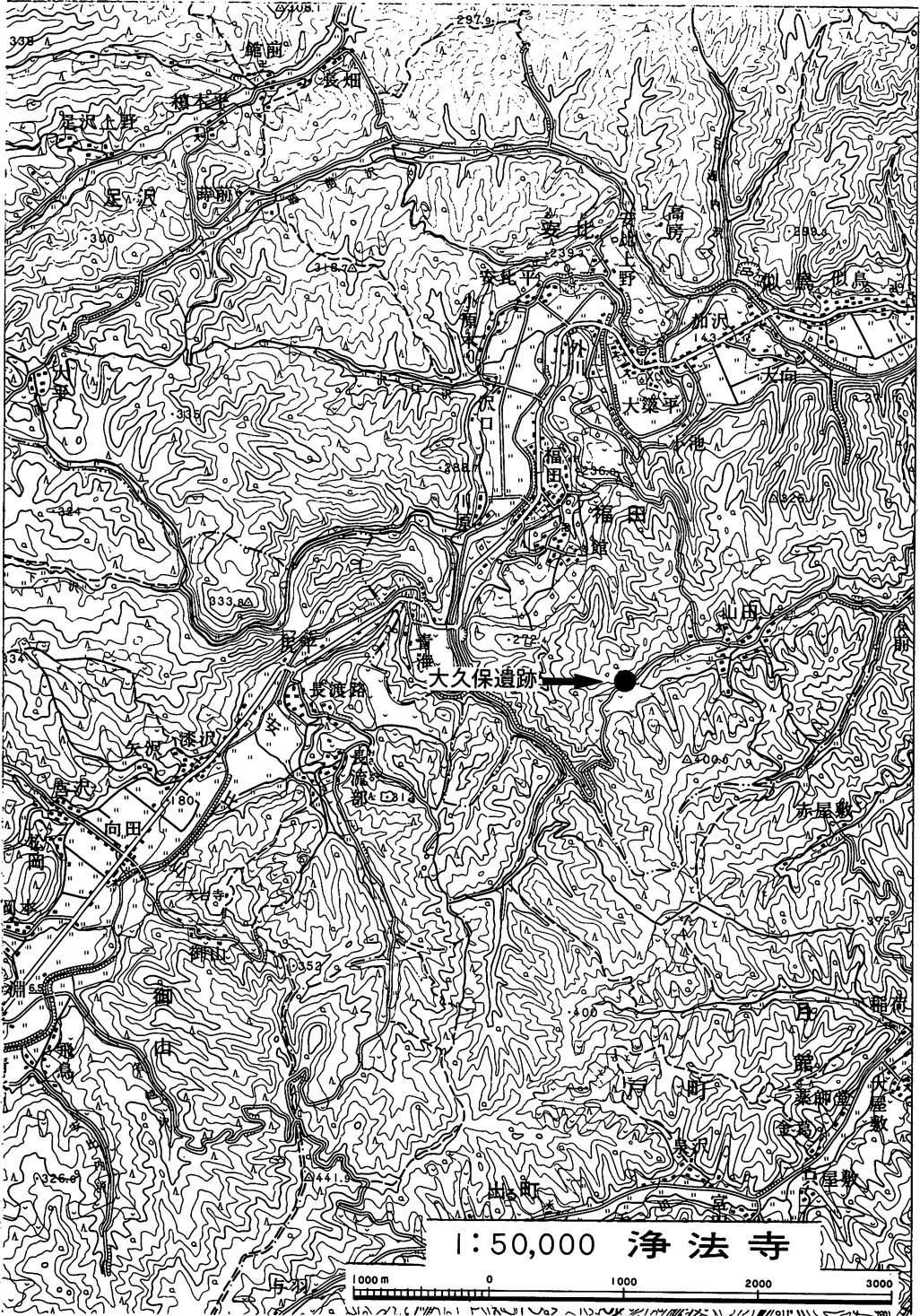
鉄製鈴

写真図版5 駒焼場遺跡出土遺物

Ⅲ 日本道路公団関係

(1) 大久保遺跡

所在地 二戸市福田字大久保31ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局 一戸工事事務所
発掘調査期間 昭和61年7月1日～10月31日
調査対象面積 10,480㎡
発掘調査面積 10,480㎡
遺跡番号・略号 J E 28—1100・OK—86
調査担当者 工藤利率・中村良一・渡辺洋一
協力機関 二戸市教育委員会



大久保遺跡位置図

1. 遺跡の位置と立地

大久保遺跡は、国鉄東北本線二戸駅の南西約7.5 kmに位置する。県道二戸～安代線の外川地区から安比川右岸に入り、南約3.5 kmで山田集落に至り、その集落から西南西～西0.6～1.0 kmに所在する。

遺跡は、標高350 m前後の山々に挟まれた谷地形の谷頭付近（標高304～322 m）に広がっており、山田集落を貫流する小河川・沢内川の源泉もこの区域に所在する。遺跡周辺は、山地の張り出しやそれらに挟まれた小規模な扇状地形が見られるものの、段丘の発達は不明瞭である。また、表層地質特に各時代の遺構形成と直接に関わる火山灰は八戸火山灰・南部浮石・中振浮石・十和田b・a火山灰が認められ、基本的に馬淵川流域や軽米地区と同様である。

2. 調査の概要

調査は、東北縦貫自動車道八戸線の建設に伴う緊急調査であり、昭和60・61年度の2年に亘って進められ、その対象区域は高速道路線の中心線に沿って最長400 m、パーキング・エリア部等で最大幅180 mの範囲にある。当初の対象面積は36,990 m²であったが、400 m²が追加され37,390 m²となった。60年度は26,910 m²を調査し、住居跡3棟、陥し穴状遺構・フラスコ形土坑などの土坑類88基、土器埋設遺構1基、炭窯跡1基、そして縄文時代早期の沈線貝殻文系土器群や同早期末～前期の繊維土器群、同後期の土器群、赤色顔料塗布や突瘤文をもつ北海道系の土器等が出土している。今年度の調査では、縄文時代後期初頭の住居跡1棟、陥し穴状遺構や墓坑様の土坑73基、近世から近代前半と考えられる焼土3基、建物跡2～3棟分を含む柱穴群を検出した。遺物は、昨年度と同様の貝殻文系土器・繊維土器などが出土している。

< 竪穴住居跡 >

住居跡は、中振浮石層上面で確認しているが、土層傾斜との関係から斜面下方2分の1前後が不明である。床部土層の締め具合から平面形は直径300 cm前後の円形を呈し、炉は巨礫で形成された石組炉で住居の東側に偏在している。明瞭な柱穴は竪穴部内外の何れでも確認されていない。出土遺物は、炉石として用いられた台石、炉内部や床面からは炭化したクルミ果殻片や土器などである。

< 土坑 >

土坑は、平面形が溝状・円形・小判形・楕円形などを呈する陥し穴状遺構32基、大小の円形・楕円形・方形などを呈し墓坑あるいは陥し穴以外の用途と考えられるもの41基に分けられる。溝状の陥し穴状遺構は、断面形・底面状態で大きく2種類に大別され、確認面や埋土の状態から各々形成された時期が異なるものである。円形・楕円形等を呈する陥し穴状遺構は、形状や底面の逆茂木の在り方から4～6種に細分できるようであるが確認面・埋土の状態から少なくとも3時期に区分できそうである。

2年間で調査した陥し穴状遺構群の配置状況を見ると、溝状の陥し穴状遺構には山裾に沿う群、谷を横断する群、そして沢筋に並行する群などがあるが、谷の北西側では散在的な分布状態を示し、南東側では密に分布している。これらは更に2～3基が直列または並列している。円形・楕円形等のものは、確認面や埋土の状態から縄文時代早・前期に大別され、これらもまた山裾に沿う群と沢筋に群をなすものがみられるが、溝状のものに比較してその分布、配列は散在的である。

〈建物跡等の柱穴群・焼土遺構〉

少なくとも2棟の掘立柱建物柱穴を含む柱穴群は、周辺から出土した陶器片、瓦器、古銭等から近世以降に属するものである。これらには農作業に関連した杭穴等が含まれると考えられ、1棟については大正期から昭和30年代末まで存在した農作業小屋跡の可能性が高い。

焼土3基については、これらの建物跡と関係するものと考えられるが、そのうち1基は掘りこみを伴い他の2基とはやや性格が異なるようである。

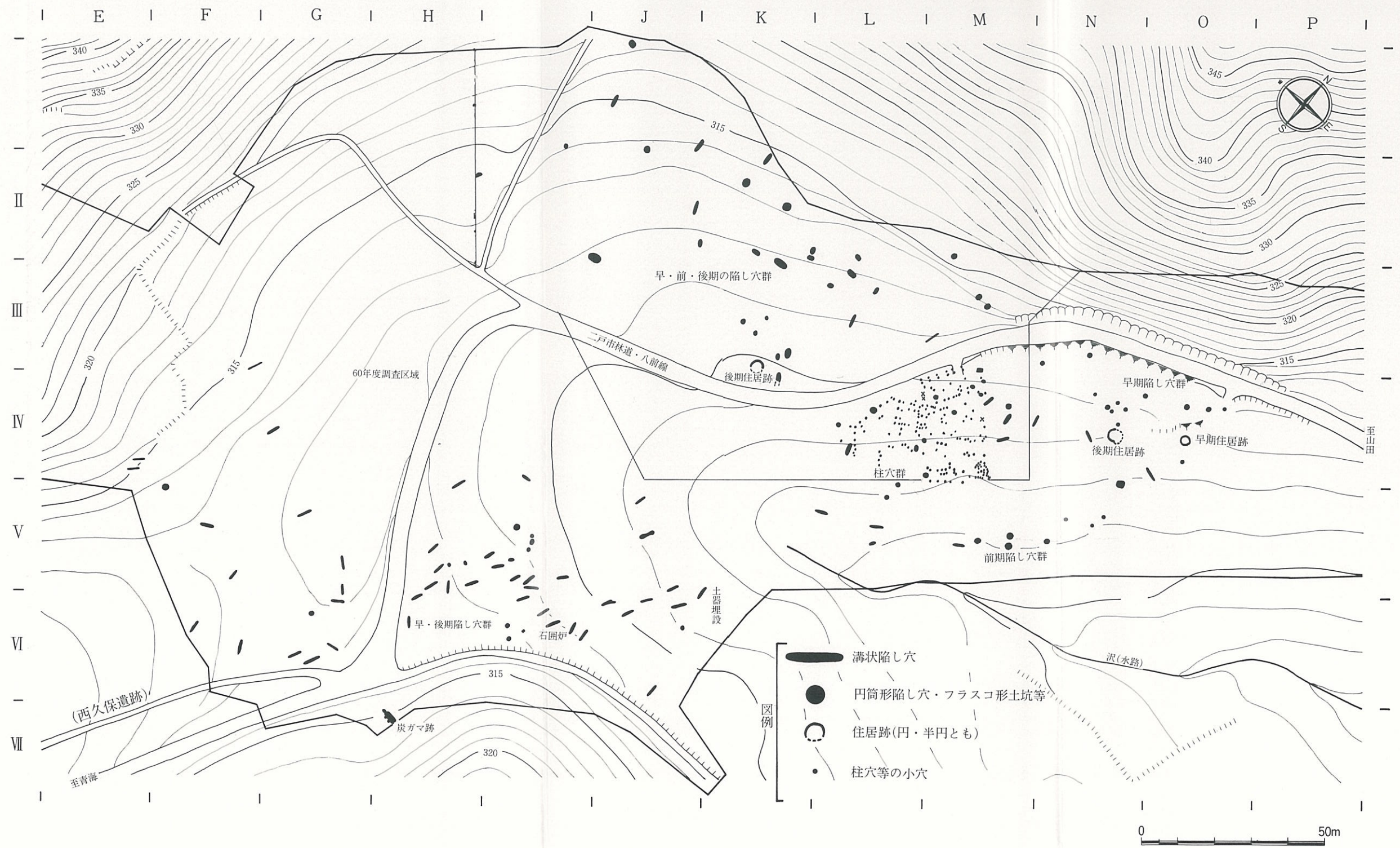
〈出土遺物〉

調査区全域からは出土しておらず、LⅢ・LⅣ・MⅢ・MⅣ区に偏在している。特に縄文時代早・前期の遺物は、250点余りの台石・擦石・敲石・剥片石器などと共に前述の区域に集中しており、このような早・前期の遺物の在り方は昨年度調査の出土傾向と同様である。早期の土器は、南部浮石層の下位層から物見台式土器群、大寺遺跡出土資料類似の横位平行の撚糸文が施された土器や口縁部付近に4条の平行する隆帯と鋸歯状沈線とが組み合い、体部には貝殻条痕文をもつものが出土している。南部浮石層と中塚浮石層との間からは丸底に近い尖底縄文土器群を確認しているが、昨年度調査で出土した吹切沢式土器群については、再確認できなかった。

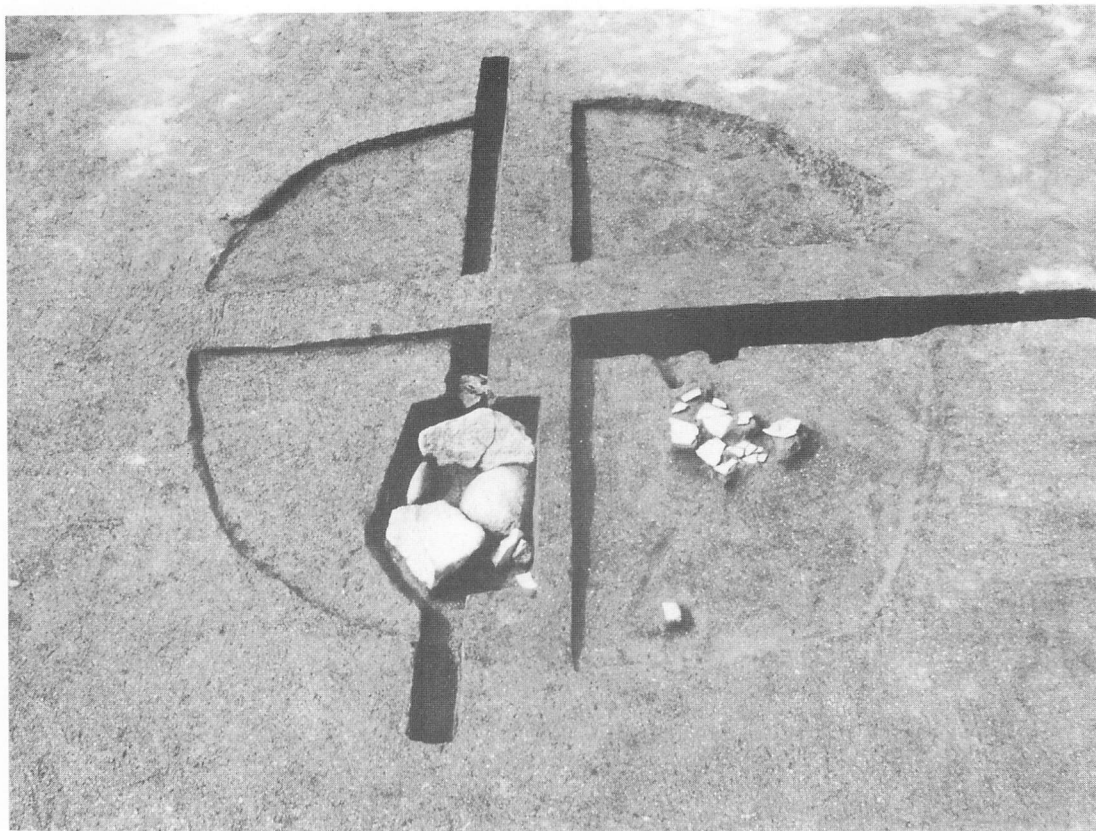
3. まとめ

調査成果として注目すべき点は次の2点があげられる。第一点は東北部における物見台式土器群と吹切沢式土器群との新旧関係を馬淵川流域や軽米地区の調査成果とを合わせると吹切沢式土器(旧)→物見台式土器(新)の関係が否定されることである。本遺跡の成果からは物見台式土器(旧)→吹切沢式土器(新)の関係となり、土器様式の在りかたや未確認資料の存在を考えた場合、両者の編年関係は何れが先後とするよりは並行関係にあると捉えた方が良いでしょう。

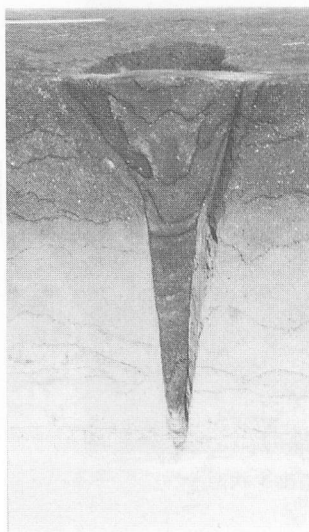
第二は近年岩手県北部等で調査例が増加している円筒形陥し穴遺構が形態分類されるだけでなく、その形態の差異が時間差をも示すことである。



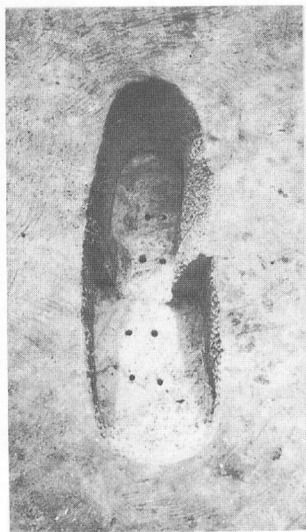
大久保遺跡遺構配置図



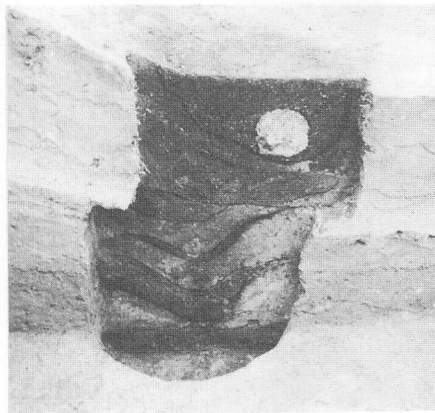
1 縄文時代と考えられる住居跡



2 溝状陥し穴状遺構



3 溝状陥し穴状遺構



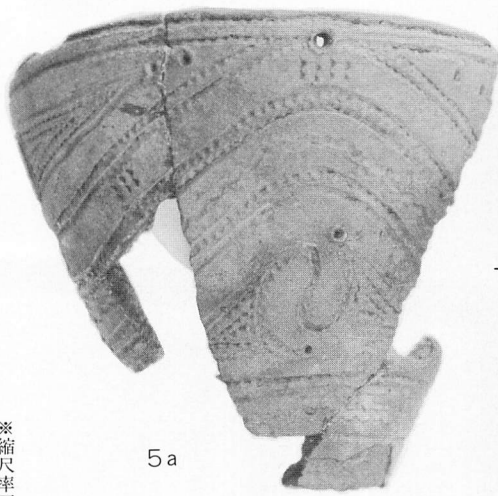
4 円筒形陥し穴状遺構

※ 2 と 4 は断面写真

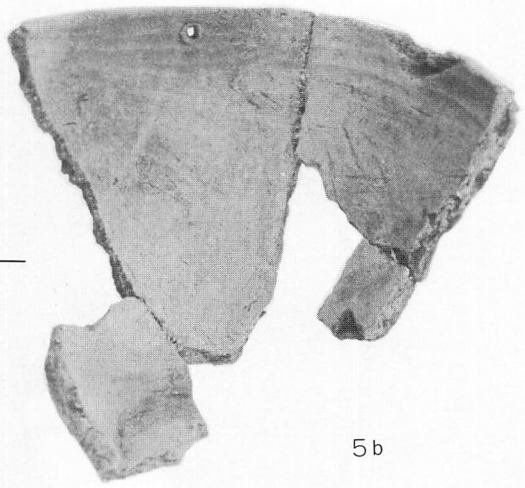
3 は底面が平坦な陥し穴状遺構

写真図版6 大久保遺跡遺構

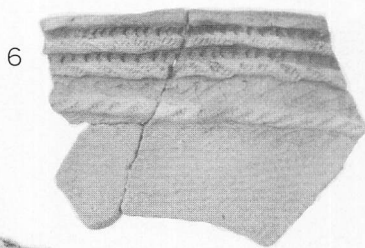
※縮尺率不定



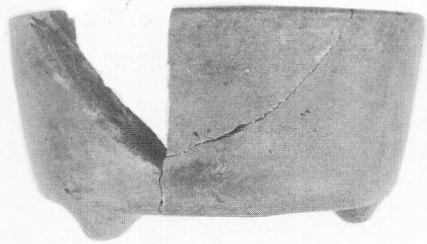
5a



5b



6



8 瓦器



7



9 写真6・7土器の出土状態

写真図版7 大久保遺跡出土遺物

(2) 太田遺跡

所在地 二戸市福田字野場塚1ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局 一戸工事事務所
発掘調査期間 昭和61年4月14日～5月10日
調査対象面積 890m²
発掘調査面積 890m²
遺跡番号・略号 JE18-2287・OT-86
調査担当者 石川長喜・田鎖寿夫
協力機関 二戸市教育委員会



大田遺跡位置図

1. 遺跡の立地

太田遺跡は、国鉄東北本線二戸駅の南西約6 kmに位置する。遺跡は安比川右岸の七時雨山麓の丘陵縁辺部にあたり、安比川支流の沢内川左岸の低位段丘相当面に立地している。標高は、250mほどである。周辺には東方に馬立Ⅰ、馬立Ⅱ遺跡がある。

2. 調査の概要

調査区域は東西約50m、南北約20mであり、調査は畑地及び土捨場を対象として実施したものである。調査の結果、埋没した沢を確認した以外に遺構の検出はないが、縄文土器54点、土師器1点、陶磁器2点を発見した。

縄文土器はいずれも破片で、器形の捉えられるものはない。破片のため断定できないが、中期～後期に属するものようである。土師器は甕の口縁部破片であり、陶磁器は紅皿である。

3. まとめ

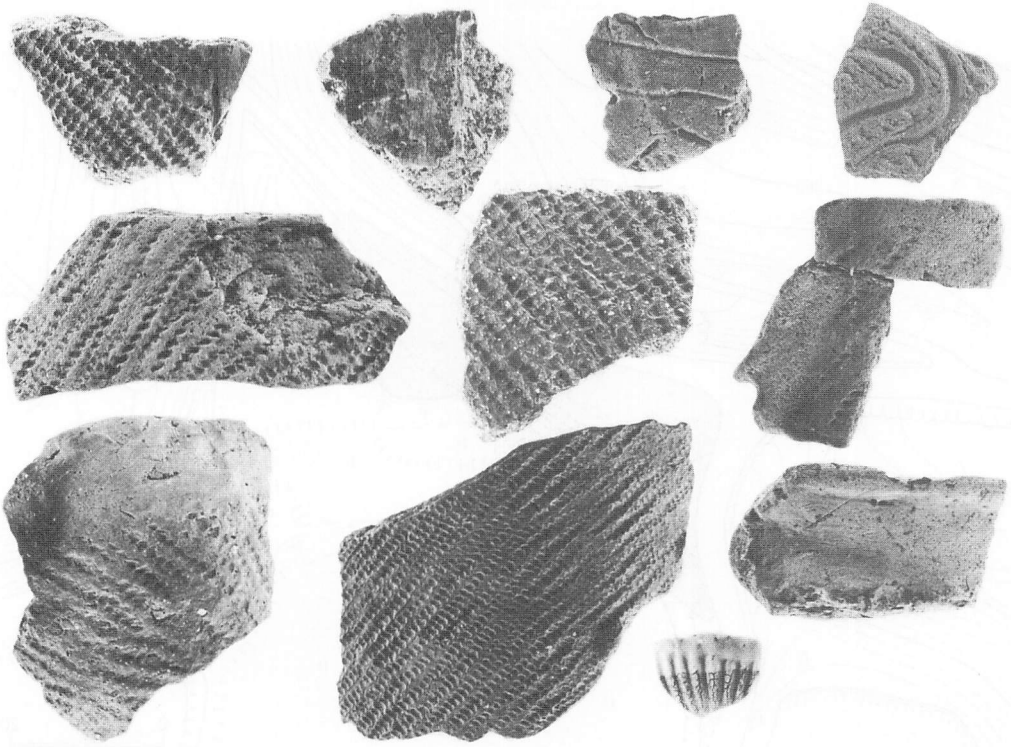
今回の調査では遺構が検出されなかったが、埋没した沢から流入した縄文土器が発見されており、調査範囲外の高位に遺跡の主体があったものと推定される。



太田遺跡調査範囲図



遺跡全景（東方から）



写真図版8 太田遺跡全景・出土遺物

(3) 馬立^{まだち} I 遺跡

所在地 二戸市福田字馬立13ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局 一戸工事事務所
発掘調査期間 昭和61年5月12日～10月31日
調査対象面積 8,810㎡
発掘調査面積 8,810㎡
遺跡番号・略号 JE18—2289・MD I—86
調査担当者 田鎖寿夫・石川長喜・平井 進・玉川英喜
酒井宗孝
協力機関 二戸市教育委員会



馬立 I 遺跡位置図

1. 遺跡の立地

馬立Ⅰ遺跡は、国鉄東北本線二戸駅の南西6kmに位置する。県道二戸・安代線からは市道外川・山田線と福田久保・中沢線を経て御返地小学校山田分校に至り、これより東約1kmにある。

遺跡は、安比川右岸に発達する七時雨山麓の丘陵縁辺部にあたり、安比川の支流である沢内川左岸の低位段丘相当面に立地する。遺跡調査区域の標高は259～272mであり、西側に太田遺跡、東側には馬立Ⅱ遺跡が隣接する。

2. 調査の概要

調査区域は東西に約150m、南北に約75mの南斜面にあり、調査は畑地と山林・原野を対象として実施したものである。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡47棟、弥生時代の竪穴住居跡4棟、住居跡状遺構1棟、ピット27基、陥し穴状遺構29基、埋設土器4基、炉・焼土7基、炭窯跡1基が検出された。

住居跡の時代・時期別分布をみると、縄文時代早期の住居跡は調査区域東側のGⅡ区に集中する。中期末葉の住居跡は調査区域西側に分布する。また後期前半の住居跡は調査区域東側のGⅠ・GⅡ・HⅠ・HⅡ区急斜面から緩斜面に集中する。弥生時代の住居跡はGⅠ・GⅡ区にほぼ集中する。

<竪穴住居跡・住居跡状遺構>

検出された縄文時代竪穴住居跡を時期別にみると、早期の住居跡が14棟、中期末葉の住居跡1棟、後期前半の住居跡21棟、現段階で時期を把握できないもの11棟となる。

早期の住居跡は形状が円形をなし、径3.5～5m、壁高は斜面上方で30～50cmである。いずれの住居跡にも床面のほぼ中央部に地床炉が認められる。これらのなかには床面が上下2時期に使用されているもの、上下に重複している住居跡、3棟の切り合い関係にある住居跡が含まれる。

中期末葉の住居跡は形状がほぼ円形をなし、径4～4.5m、壁高40cmで、斜面下方の壁際床面に複式炉をもつ。

後期前半の住居跡は形状が円形と方形状に分けられる。全体に流失し壁の立ち上がりが明確でない住居跡、斜面下半分を欠く住居跡が大半を占める。規模は径5m前後のものが多い。炉は床面のほぼ中央部に位置し、石囲炉が主体を占める。

弥生時代の竪穴住居跡は形状が円形をなし、径3.5～4.5mで、床面中央部に石囲炉をもつ。このうち3棟は炉内に土器を埋設している。これらの住居跡も縄文時代後期前半の住居跡と同様に、流失し斜面下半分を欠く。

住居跡状遺構は一部分の壁のみ検出されたもので、形状・規模は不明である。

<ピット>

ピットは主に調査区域西側に偏在して検出され、断面の形状からフラスコ状と円筒状に分けられる。フラスコ状ピットの規模は、開口部径70～160cm、底部径110～180cm、深さ50～100cmのものである。

<陥し穴状遺構>

陥し穴状遺構は調査区域南側と中央部沢沿いに多く検出された。規模と形状から、細長い溝状となる陥し穴状遺構とこれより幅広で深い陥し穴状遺構に分けられる。前者は開口部の長さ5m、幅20cm、深さ80cm、後者は長さ3～4m、幅60～80cm、深さ1.8mほどである。

<埋設土器・その他の遺構>

埋設土器は、調査区域の東側と西側に検出された。時期的にみて縄文時代後期前半に属し、使用されている土器は粗製深鉢型土器である。

炉・焼土は東側と西側に偏在して検出されたが、遺物を伴う焼土があり、調査区域全体が流失をうけていることから考えて、住居跡に伴うものが含まれているものと思われる。

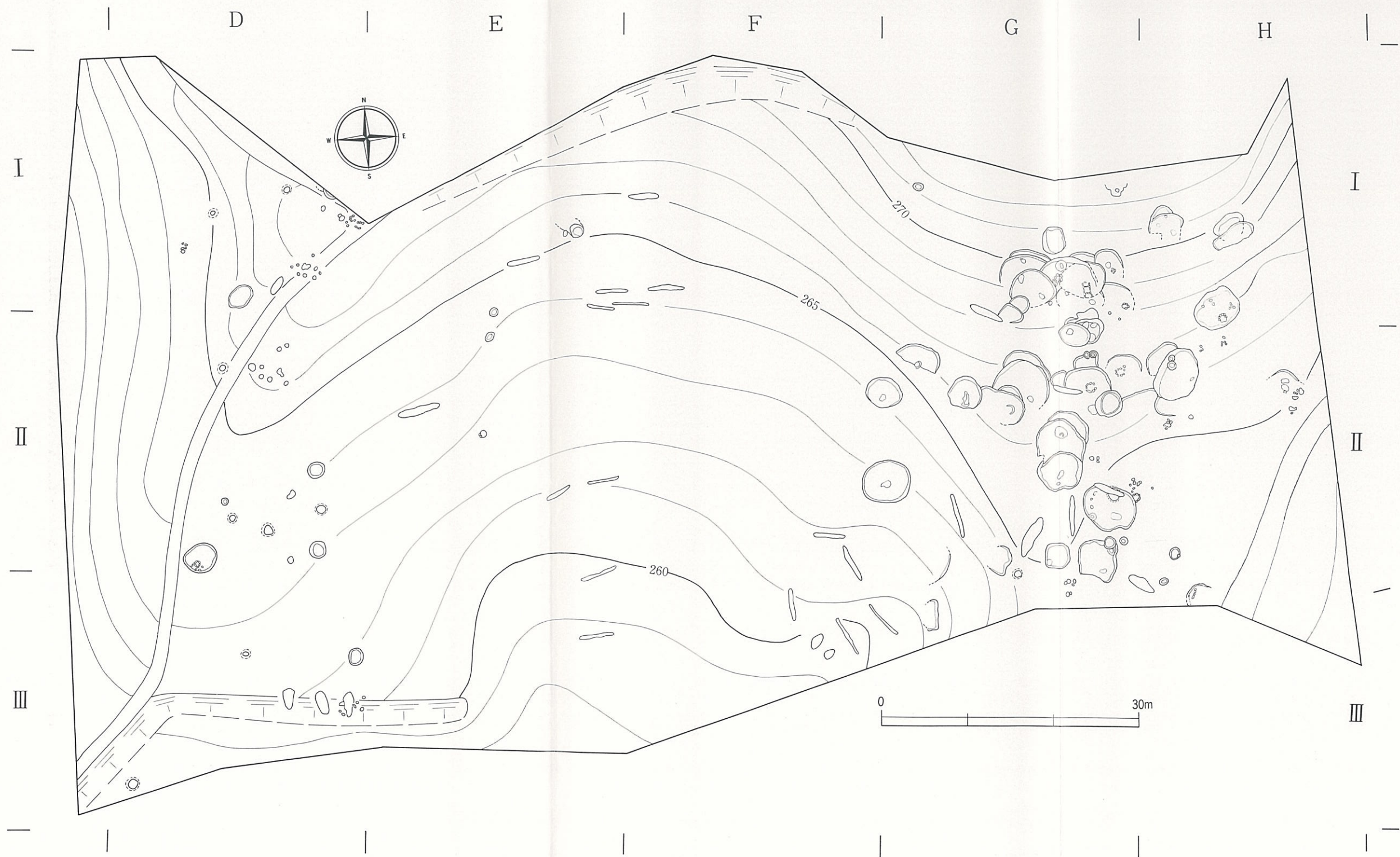
<出土遺物>

出土した遺物は、縄文時代早期、前期、中期、後期の土器、弥生時代の土器、石器、土偶等の土製品、石製品等である。その大部分は縄文時代早期と後期の土器である。早期の土器はFⅡ・GⅡ区の早期住居跡及びその周辺から多く出土した。また後期の土器はHⅠ・HⅡ区の沢沿いに遺物包含層を形成しており、この地点から多量に出土した。

3. まとめ

今回の発掘調査によって、縄文時代早期、後期、弥生時代の住居跡が発見され、これら3時期からなる複合集落遺跡であることが明らかになった。

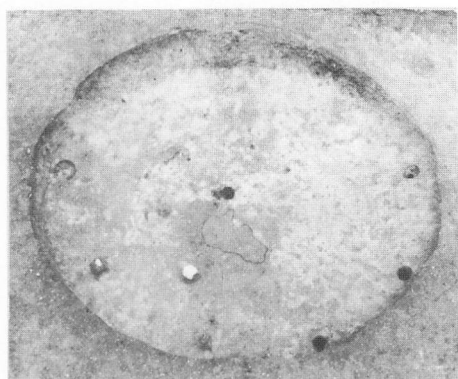
縄文時代早期と後期の住居跡の埋土及び床面からは、復元可能な土器が多く出土しており、土器の編年を知るうえで良好な資料となるものと考えられる。



馬立 I 遺跡遺構配置図



遺跡全景



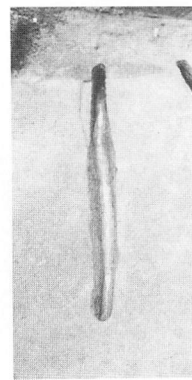
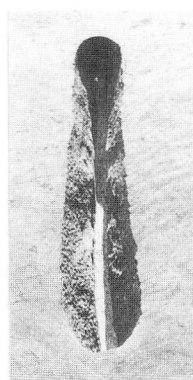
縄文時代早期住居跡



縄文時代後期住居跡

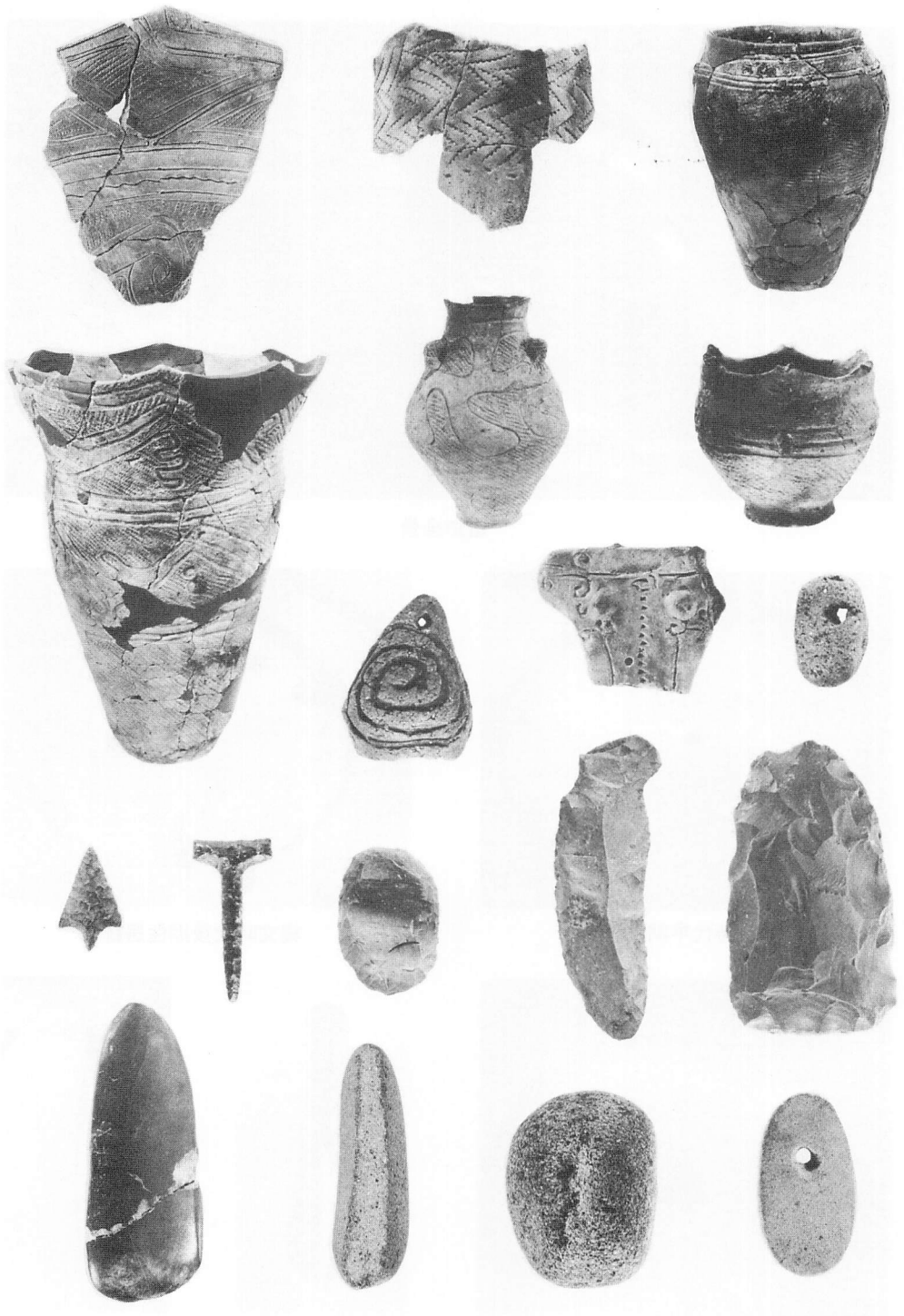


弥生時代住居跡



陥し穴状遺構

写真図版9 馬立 I 遺跡遺構



写真図版10 馬立 I 遺跡出土遺物

(4) 馬立^{まだち}II遺跡

所在地 二戸市福田字馬立18—15ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局 一戸工事事務所
発掘調査期間 昭和61年6月2日～10月31日
調査対象面積 8,690㎡
発掘調査面積 8,690㎡
遺跡番号・略号 JE18—2298・MDII—86
調査担当者 菊池利和・高橋義介・佐々木嘉直
協力機関 二戸市教育委員会



馬立II遺跡位置図

1. 遺跡の立地

馬立Ⅱ遺跡は、国鉄東北本線二戸駅の南西6kmにあり、安比川沿いの外川地区から南へ市道外川・山田線で山田地区に至り、そこから北東1.3kmの位置にある。遺跡は七時雨山麓の東縁部山地の南斜面に立地している。調査区域の中央部には沢があり、東側と西側は南に延びる尾根状地形となっている。標高は270m～278mである。

遺跡の現況は林道の北側が畑地、南側は原野である。

2. 調査の概要

調査区域は南北70m、東西140mの範囲である。調査の結果検出された遺構は、縄文時代竪穴住居跡18棟、竪穴住居跡状遺構1棟、炉跡・焼土遺構16基、土坑24基、陥し穴状遺構14基、配石遺構1基、埋設土器4基、炭窯跡1基である。出土した遺物は土器・石器等である。土器は縄文時代早期～後期に属するものと弥生時代のものが出土しているが、出土量は縄文時代後期のものが大半を占める。石器は総数560点を数え、その約7割が剥片石器である。他に土製品、石製品が出土している。

<竪穴住居跡・住居跡状遺構>

竪穴住居跡18棟は縄文時代のものである。時期別には、縄文中期末葉～後期初頭のもの2棟、後期前葉のもの12棟、後期に属すると思われるもの2棟、時期不明なもの2棟である。住居跡の多くは、東西にある尾根の南側や尾根筋から中央沢寄りの緩斜面に立地している。住居跡の傾斜下方の壁や床面が流失しているもの、または傾斜下方の壁の立ち上がりが不明なものが多いが、平面形は隅丸方形と思われるもの3棟、円形を基調とするもの13棟である。他の2棟は炉と床面のみの検出で形状は不明である。床面の規模は径2.8m～4.2mの範囲に含まれ、概して小型である。炉の位置は床面中央にある住居跡と、南東側に寄る住居跡とがある。炉の形態は石田炉をもつ住居跡4棟、磔を1～2個埋置した炉をもつ住居跡3棟、地床炉をもつ住居跡8棟である。柱穴及び柱穴状ピットが検出されているのは5棟で他は検出されていない。

竪穴住居跡状遺構は、4.0m×3.5mの不整な長方形を呈し、炉跡はない。遺構の時期は縄文時代中期末葉～後期前葉と考えられる。

<炉跡・焼土>

炉跡4基、焼土遺構12基が検出されている。炉跡はいずれも配石炉であり、住居跡に伴うものであった可能性がある。焼土遺構は現地性焼土10基、異地性焼土2基である。これらの遺構は縄文時代に属するものと考えられる。

<土坑・陥し穴状遺構>

土坑は24基検出されている。そのうち埋土の状況等から現代のものと考えられる土坑は7基

である。開口部の規模は一辺1～2mで方形や長方形をなし、断面形が浅鉢状である。他の17基は縄文時代に属し、開口部の規模は径0.3m～1.7m、深さが0.2m～1.4mと規模に大小の差異がある。形状は、平面形が円～楕円形で浅鉢状のもの7基、平面形が円～楕円形でフラスコ状のもの4基、円筒状のもの2基、他に平面形が長方形、隅丸方形を呈するものなどがある。

陥し穴状遺構は14基検出されている。西側尾根筋に3基、東側尾根筋から南西方向にかけて11基が分布し、尾根方向に平行するものが多い。平面形は溝状を呈するものと長楕円形状を呈するものがあり、短軸の断面形はVまたはU字状を呈す。規模は、長軸の長さが2.4m～4.2m、開口部幅は0.5m～1.2m、深さは1.0m～1.6mである。溝状を呈するものは、底部幅が0.2m以下と狭い。

<配石遺構・埋設土器・その他>

配石遺構は調査区南東にあり、径20cm～40cm・幅10cmほどの亜角礫を30数個埋置している。礫は4.0m×3.5mのほぼ円形を呈する部分と、その東側に1m程の「ハ」の字状に広がる部分に配置される。遺構の時期は縄文時代と考えられるが、遺構の性格は不明である。

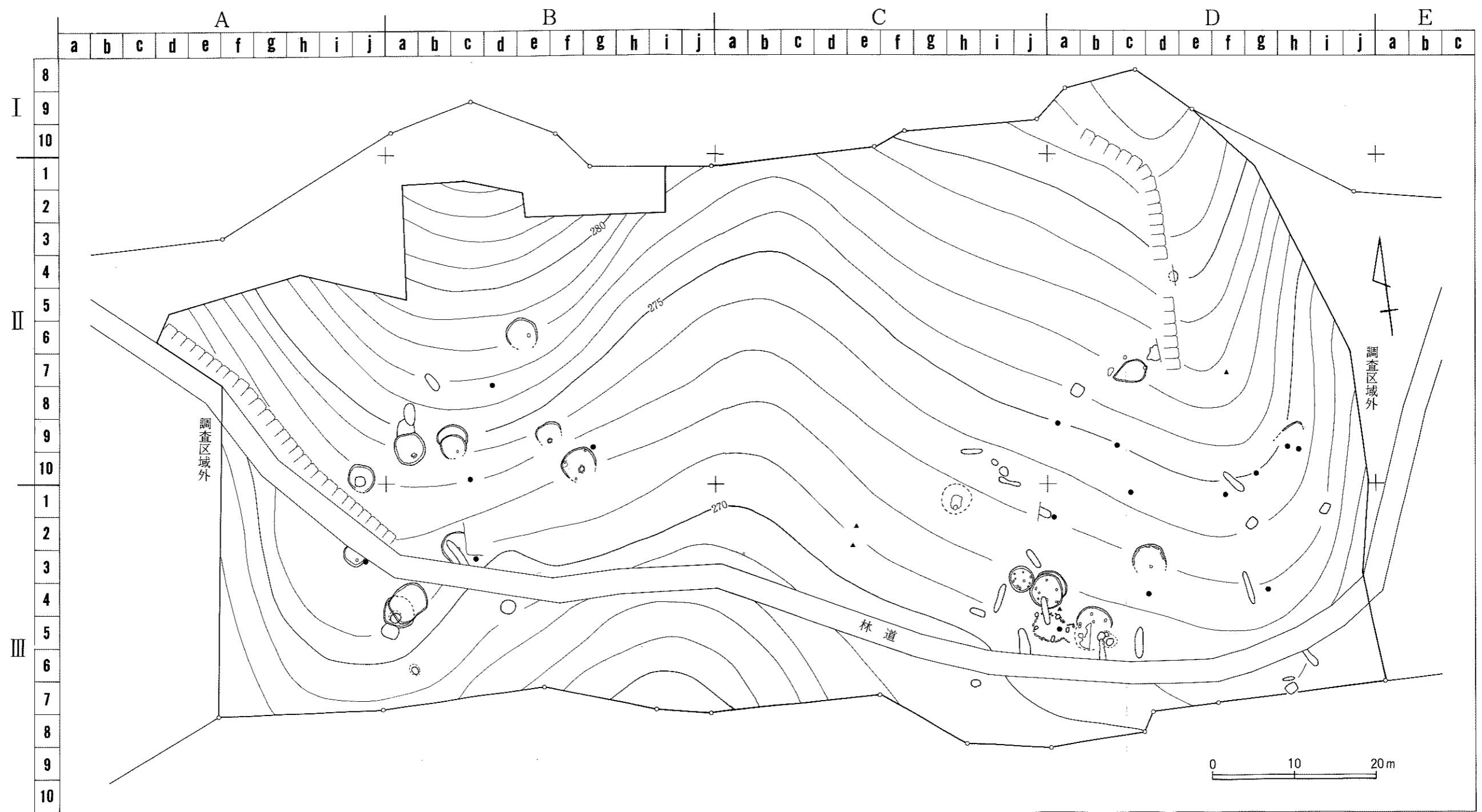
埋設土器は4基で、土器は縄文後期に属する深鉢及び鉢で、正立位のもの2基、倒立位のもの2基である。他に現代の炭窯跡1基ある。規模は4.2m×2.8mで焚口部が狭くなる卵形を呈するものである。

<出土遺物>

出土した遺物は、土器、土製品、石器、石製品等である。土器は縄文時代早期～後期と、弥生時代のものであるが、その大半は縄文後期に属する。器種は、深鉢・鉢・浅鉢・壺などで、ミニチュア様の小形の土器が含まれる。フラスコ状を呈する土坑の底部からは隆帯で弓矢・動物等を表現した狩猟文をもつ壺が出土している。土製品には土偶・鐔形土製品・円盤状土製品などがある。石器は石鏃・石匙・搔器・楔形石器・磨製石斧・磨石・石皿・凹石などである。石製品には円盤状石製品・有孔石製品がある。

3. まとめ

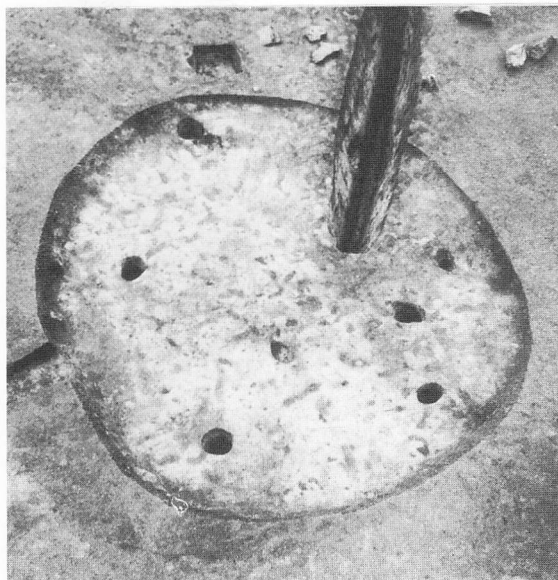
本遺跡は、検出された遺構から、縄文時代中期後葉～後期の集落遺跡であり、またこの時期と相前後する時期の狩場であったことが判明した。遺物の出土状況や地形的広がりから、集落はさらに南側に広がるものと考えられる。検出された住居跡数に比べ土坑数が少ないのは、土坑域が南側にあるものと推測される。



馬立Ⅱ遺跡遺構配置図



遺跡全景（北から）

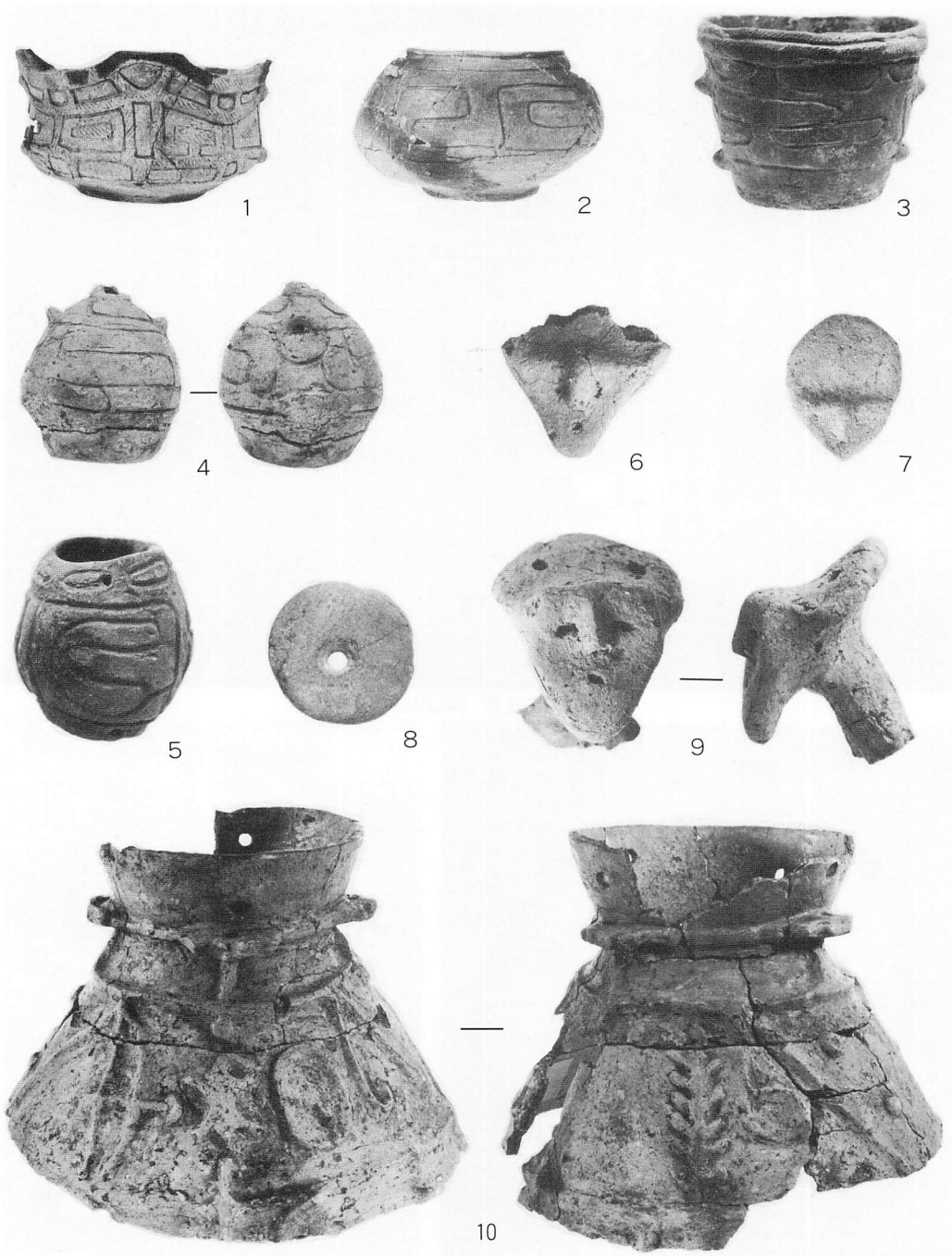


縄文住居跡・陥し穴状遺構



配石遺構

写真図版11 馬立II遺跡遺構

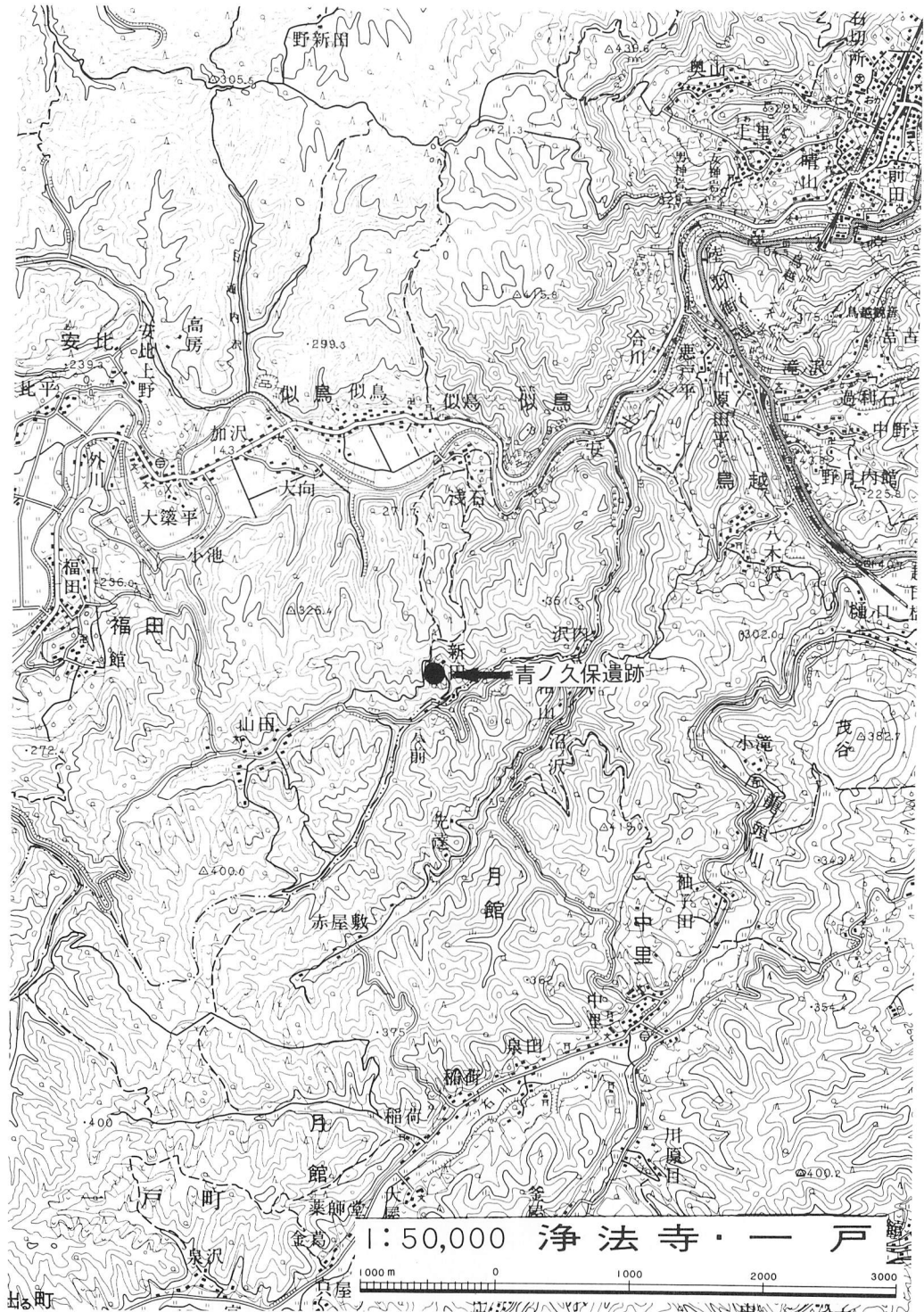


1~5・10 縄文土器
 6・7・9 土偶
 8 石製品

写真図版12 馬立II遺跡出土遺物

(5) 青^{あお}ノ久保^{くぼ}遺跡

所在地 二戸市似鳥字青ノ久保19—9ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局 一戸工事事務所
発掘調査期間 昭和61年4月14日～6月30日
調査対象面積 2,400㎡
発掘調査面積 2,400㎡
遺跡番号・略号 JE18—2378・AK—86
調査担当者 工藤利幸・中村良一
協力機関 二戸市教育委員会



青ノ久保遺跡位置図

1. 遺跡の立地

青ノ久保遺跡は、国鉄東北本線二戸駅の南西5.5kmに位置し、県道二戸・安代線からは、市道外川・山田線と福田久保・中沢線を経て御返地小学校山田分校に至り、これより東1.8kmに所在する。

遺跡は、安比川右岸に発達する七時雨山麓丘陵北東縁辺部にあたり、安比川の支流である沢内川左岸の中位段丘相当面に立地する。沢内川との比高は45m～58mである。遺跡の南西、北東側は谷に、南東側は段丘崖によってそれぞれ限られており、標高は255m～268mである。

2. 調査の概要

本遺跡の調査区域は、東西約65m、南北約60mである。調査面積は当初1,820㎡であったが、南側に張り出す緩斜面に遺構が検出されたことから、隣接する南側緩斜面を調査範囲に加え、2,400㎡となったものである。

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡2棟、奈良時代の竪穴住居跡5棟、平安時代の竪穴住居跡5棟、住居跡状遺構1棟、土坑15基、陥し穴状遺構3基、炭窯跡2基、焼土遺構3基である。

出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、縄文時代の土製品、石器、石製品、及び古代の鉄製品等である。

<竪穴住居跡>

縄文時代の住居跡は2棟とも、土壌流失等のために壁は遺存せず、1棟は地床炉と床面の一部、他の1棟は石囲炉の一部を残すだけである。柱穴も確認できず、規模や形態は不明である。

古代の住居跡10棟は、調査区中央平坦部から南側緩斜面にかけて9棟、東側段丘崖縁部から1棟検出されており、南側緩斜面では、奈良時代の住居跡と平安時代の住居跡が壁を接するように並列している。また、大半の住居跡が焼失を受けているものと考えられる。

奈良時代の住居跡は、平面形がほぼ隅丸方形を呈し、規模は一辺が310cm～400cmである。埋土には十和田a火山灰がレンズ状に厚く堆積している。カマドは北西壁のほぼ中央に設けられ、刳貫き式の煙道部をもつ。柱穴は1棟の住居跡から5個検出されているが、他の4棟は確認できなかった。出土した遺物はロクロ不使用の土師器甕及び坏が数点である。

平安時代の住居跡は、平面形がほぼ隅丸方形を呈し、規模は4棟が一辺350cm～400cmであり、中央平坦部から検出された1棟は、一辺550cmで当遺跡最大である。カマドは5棟とも遺存状態が悪いが、2棟が南東壁北寄りに、1棟が南東壁南寄り、1棟が南東壁隅部、1棟が南壁西寄りに設けられていたものと考えられる。掘り込み式の煙道部をもつものが1棟で、他の4棟は確認されていない。柱穴と考えられるものが2棟から検出されているが、上屋構造を把握しうるものではない。また4棟の床面から小土坑が検出されている。出土した遺物はロ

クロ不使用の土師器甕、ロクロ成形の土師器坏、須恵器甕のほかに、火打金や紡錘車等の鉄製品も出土している。

<土坑>

土坑は調査区の北東から東にかけての斜面に集中する傾向がみられる。検出面の状況及び埋土等から平安時代に属するものは3基である。規模は異なるが、形状はほぼ直方体に近い。他の12基の形状は、円筒形のもの2基、フラスコ状が4基、皿状が6基である。それらの中で平面形が楕円形を呈するもの3基があるが、2基は墓坑類の可能性はある。

<陥し穴状遺構>

3基検出された陥し穴状遺構は二つのタイプに分類される。1基は上端径180cm、下端径60cm、深さ110cmの円筒形を呈し、逆茂木と思われる杭跡が底部にみられ、縄文時代前期の遺構と考えられる。他の2基は、上端360cm×60cm、深さ70～80cmの溝状を呈し、2基並列して検出された。縄文時代後期の遺構と考えられる。

<炭窯跡>

2基のうち、調査区北西端部から検出された1基は、上端130cm×100cmの長方形を呈し、深さは15cmである。形状及び占地状況から近世以降の構築と考えられる。他の1基は調査区南側緩斜面から検出され、平面形は楕円形を呈する。燃焼部の前方及び両脇に製炭部が設けられる構造を示す。遺構の時期は明らかでない。

<焼土遺構>

3基の焼土遺構は、径50～60cmの不整な円形を呈するが、性格等は不明である。

<出土遺物>

遺物は調査区全域から出土しているが、古代の遺物は住居跡等の遺構内からのものが大半を占める。遺構外の遺物包含層からは縄文時代の遺物が多量に出土しており、その大部分は後期初頭を中心とした土器片である。その他、異形土器、土製品、石製品等が若干出土している。

3. まとめ

調査の結果、当遺跡は縄文時代、奈良時代・平安時代の複合遺跡であることが判明した。

縄文時代の住居跡は2棟であるが、多量の遺物とその出土状況から、遺跡の主体は調査区北西の斜面上方に存在する可能性があげられるほか、土壌の流失や畑地造成に伴う削平により既に消滅していることも考えられる。

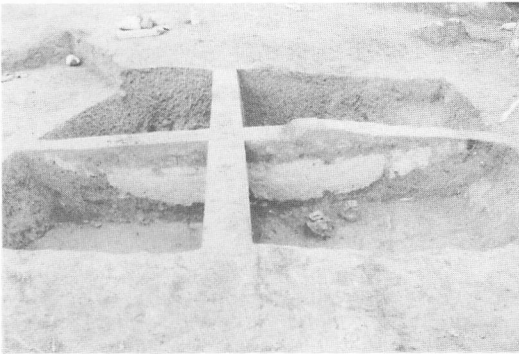
奈良時代・平安時代の住居跡はあわせて10棟であるが、高地に営まれていることや住居跡の配置状況に特徴があること等、該期の集落についての好資料が得られた。



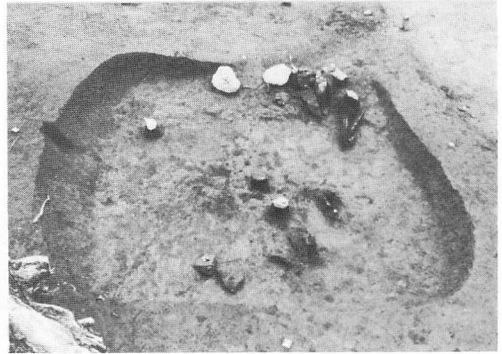
青ノ久保遺跡遺構配置図



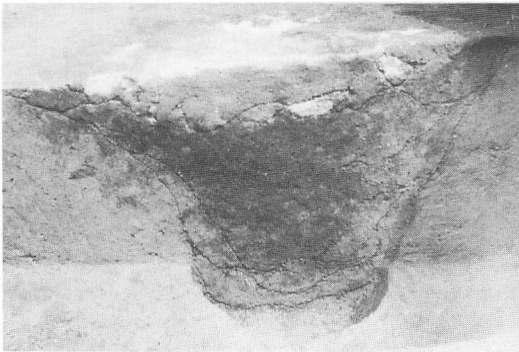
遺跡全景（南東から）



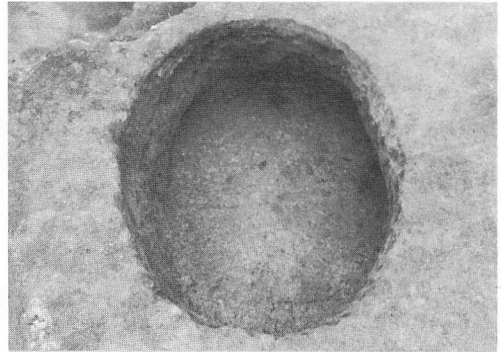
B III02 住居跡



C III02 住居跡

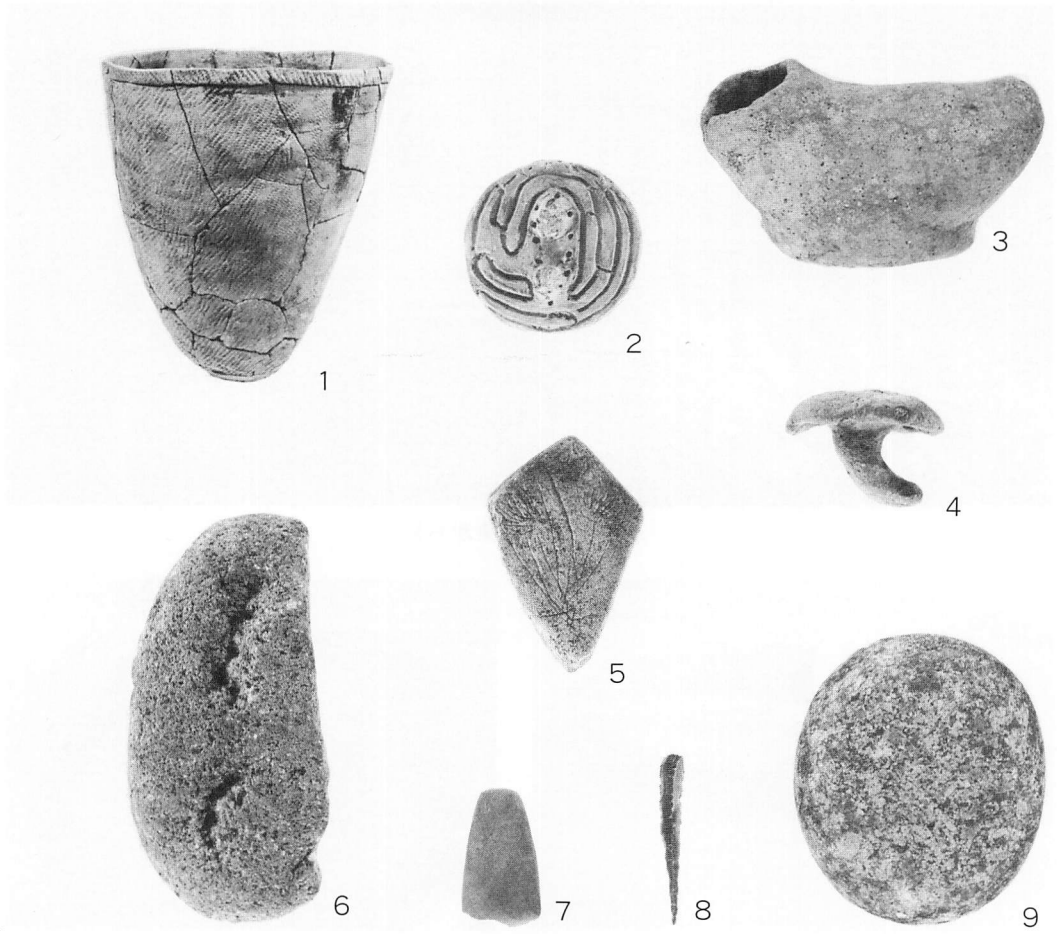


C II 101 陥し穴状遺構

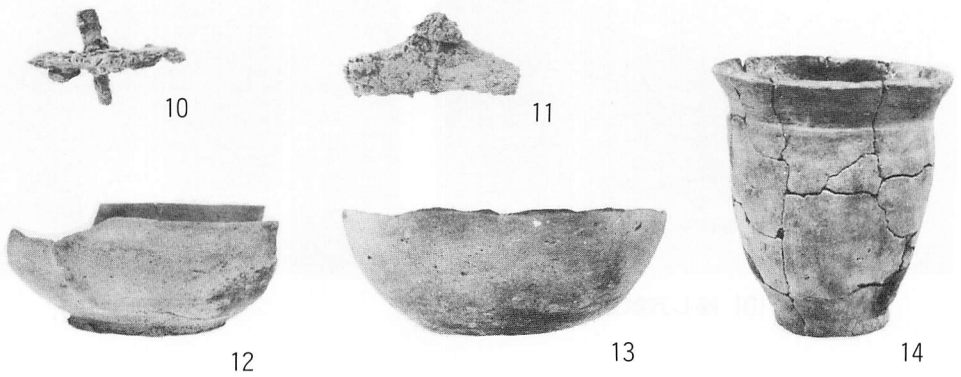


D III109 土坑

写真図版13 青ノ久保遺跡遺構



縄文時代の遺物 (1～4 土器・土製品、5～9 石器・石製品)

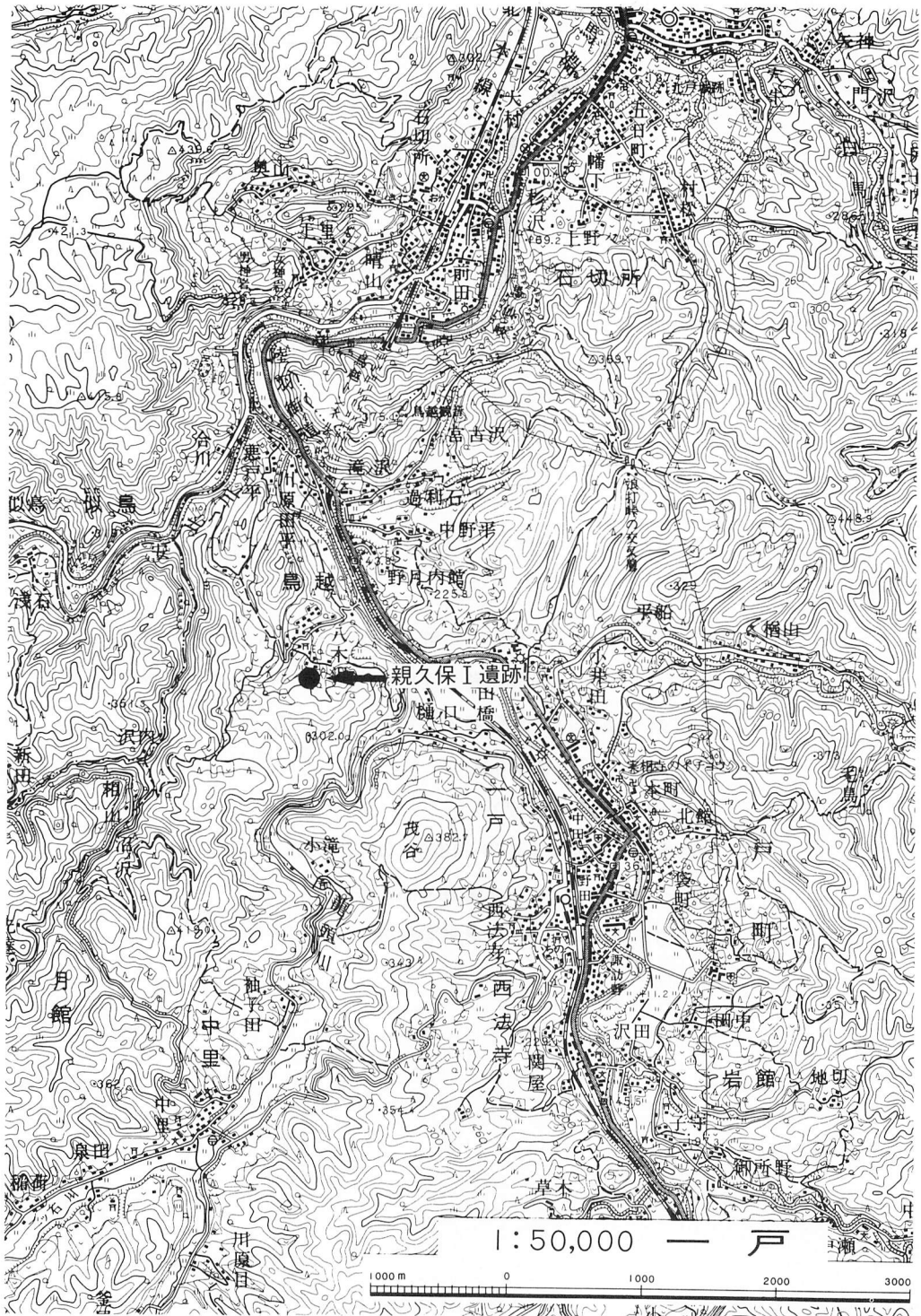


古代の出土遺物 (10・11 鉄製品、12～14 土師器)

写真図版14 青ノ久保遺跡出土遺物

(6) おやくほ 親久保 I 遺跡

所在地 二戸郡一戸町一戸字親久保183—23ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局 一戸工事事務所
発掘調査期間 昭和61年4月14日～5月24日
調査対象面積 2,970㎡
発掘調査面積 2,970㎡
遺跡番号・略号 JE19—1270・OKI—86
調査担当者 佐々木嘉直・酒井宗孝
協力機関 一戸町教育委員会



親久保 I 遺跡位置図

1. 遺跡の立地

親久保Ⅰ遺跡は、国鉄東北本線一戸駅から北西約2.8kmに位置する。国道4号からは町道八木沢線を1.9km経て八木沢公民館に至り、これより南東0.2kmに所在する。

遺跡は七時雨山麓丘陵の北東端部にあたり、馬淵川左岸の支流八木沢によって開析された丘陵北斜面の山腹に立地する。標高は194～203mである。

現状は畑地である。東側は北に下る枝尾根に続き、南側は削平されている。西側は埋没谷で全体に大きく削平または盛土され、緩斜面を形成している。

2. 調査の概要

調査区域は、東西80m、南北55mの範囲である。調査の結果、検出した遺構は溝跡1条、土坑2基、陥し穴状遺構1基である。出土した遺物は、縄文土器、弥生土器と石器である。

<溝跡>

東側調査区の稜線部から北西側に検出された湾曲する溝跡である。長さは17.5m、幅は最大40cm、深さは10cm前後であり、断面形は皿形である。溝の底面は平坦で堅くしまっている。

<陥し穴状遺構>

西側調査区の沢頭付近で検出された。開口部の長さ384cm、幅98cm、深さ124cmであり、底部の幅は12～14cmと狭い。断面形はV字形である。

<土坑>

調査区の東西で検出された。2基とも平面形が円形の浅い皿形の土坑であり、開口部の直径は130cmと90cmである。

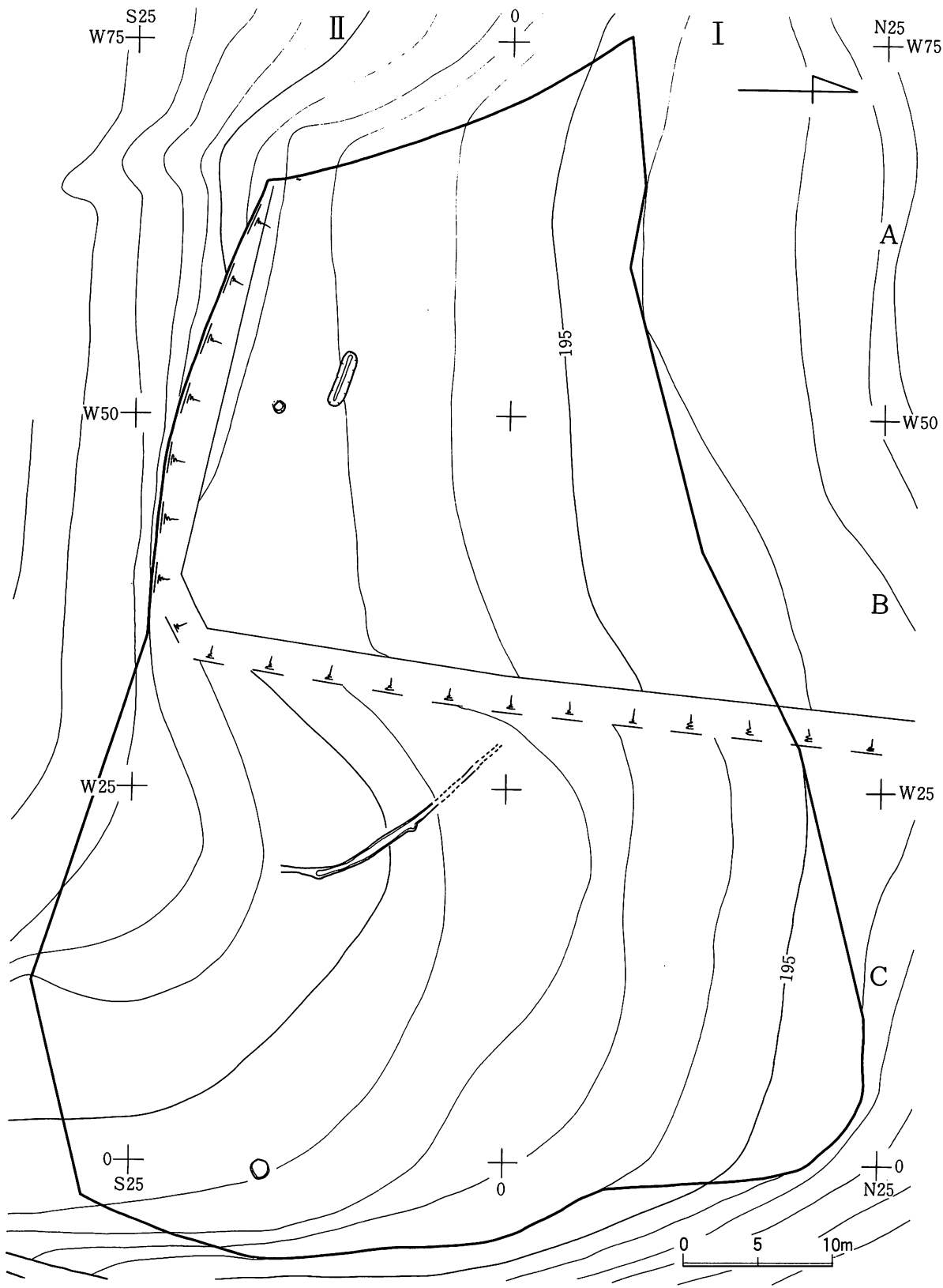
<出土遺物>

出土遺物には、縄文土器、弥生土器、石器があるが、出土量は極めて少ない。縄文土器はいずれも小破片で、後期・晩期のものと考えられる。弥生土器は西側畑地から一括して出土した壺である。体部中央に沈線による連弧文が巡り、上半部には磨消技法によって渦巻文が施されている。口縁部には指頭圧痕による凹凸がみられ、下位に沈線区画された交互刺突文がある。文様の特徴から弥生時代後期の土器と考えられる。

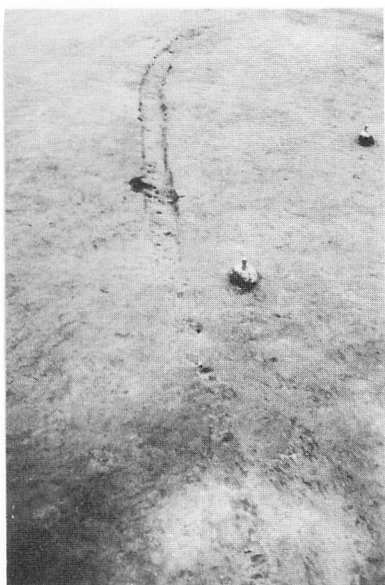
3. まとめ

調査区域の大部分が削平されていたが、若干の遺構と遺物が発見されたことから、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡であることが判明した。

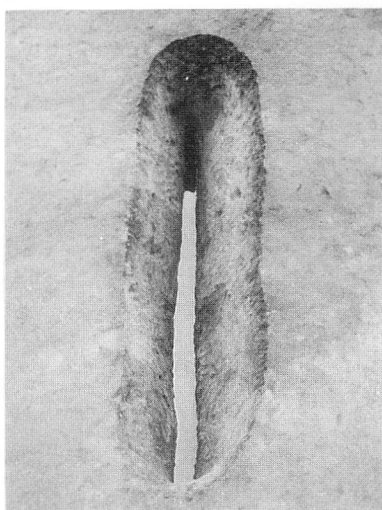
陥し穴状遺構は沢頭付近にあり、斜面にほぼ平行するように配置されており、調査区外にもこれと対をなす遺構の存在が予想され、縄文時代の狩場跡であったことが推測される。



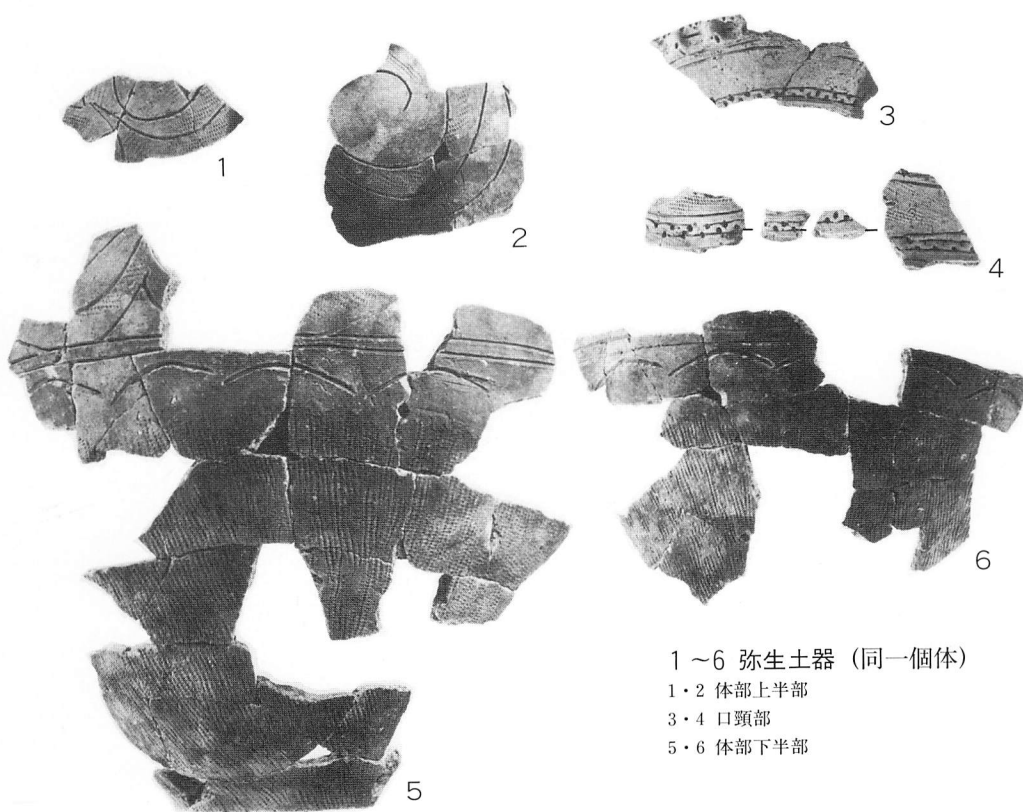
親久保 I 遺跡遺構配置図



溝 跡



陥し穴状遺構



1~6 弥生土器 (同一個体)

1・2 体部上半部

3・4 口頸部

5・6 体部下半部

写真図版15 親久保 I 遺跡遺構・出土遺物

(7) おやくほ 親久保 II 遺跡

所在地 二戸郡一戸町一戸字親久保112-1ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局 一戸工事事務所
発掘調査期間 昭和61年5月26日～8月30日
調査対象面積 6,740㎡
発掘調査面積 6,740㎡
遺跡番号・略号 JE19-1189・OKII-86
調査担当者 佐々木嘉直・渡辺洋一・酒井宗孝
協力機関 一戸町教育委員会



親久保Ⅱ遺跡位置図

1. 遺跡の立地

親久保Ⅱ遺跡は、国鉄東北本線一戸駅から北西約2.7kmに位置する。国道4号からは町道八木沢線を1.9km経て八木沢公民館に至り、これより南東約0.3kmに所在する。

遺跡は七時雨山麓丘陵の北東端部にあたり、馬淵川左岸の支流八木沢によって開析された丘陵の北斜面山腹に立地する。

調査区域は東西2区に分けられる。西側のA区は、標高194～186mの北向き緩斜面であり、現状は畑地と山林である。東側のB区は北東に下る枝尾根の稜線部である。標高は222～210mであり、現状は山林である。

2. 調査の概要

調査区域は、A区が東西80m・南北70m、B区が東西75m・南北40mである。調査の結果、検出した遺構はA区とB区合わせ、縄文時代竪穴住居跡4棟、平安時代竪穴住居跡5棟、竪穴住居跡状遺構1棟、土坑35基、陥し穴状遺構1基、焼土遺構1基である。出土した遺物は、縄文土器、弥生土器と石器である。

<A区の遺構>

縄文時代の土坑5基と平安時代の竪穴住居跡5棟が検出された。

土坑は調査区のほぼ中央に4基が南北に並び、他の1基は南西隅で検出された。検出面の平面形は円形であり、断面形はフラスコ状2基、バケツ状3基である。検出面の直径は1～2m、深さは0.5～1mである。埋土は自然に流入し、埋没したものである。CⅡ-3土坑は、底部の中央に深さ50cmの杭跡があり、機能的には陥し穴と考えられる。

平安時代の竪穴住居跡は、ほぼ等間隔で同心円状に近い分布を示している。平面形は主軸を北西—南東方向にもち、隅丸方形に近い。規模は2m以上が1棟、3m以上が3棟、不明1棟である。いずれも焼失住居跡であり、床面付近に炭化材と焼土が分布し、その直上を白頭山火山灰が3～5cmの厚さで被っている。壁はほぼ直角に立ち上がり、床面は平坦である。貼床は3棟で認められたが、柱穴は検出されなかった。

カマドはすべて北西壁のほぼ中央に位置し、煙道は削貫き式である。袖部に芯材として礎を使用したものは2棟であり、他は不明である。燃焼部から煙出しまでの長さは、2～2.4mでほぼ一定している。

<A区の出土遺物>

出土量は極めて少ないが、縄文土器、土師器、石器、鉄器、古銭がある。縄文土器は遺跡内に流れ込んだものが主であり、時期は前期～後期のものがみられる。土師器は、住居跡の床面から出土したものが主体であり、器種は甕、小型壺、坏である。

＜B区の遺構＞

縄文時代の竪穴住居跡4棟、住居跡状遺構1棟、陥し穴状遺構と焼土遺構各1基、縄文～弥生時代の土坑30基が検出された。

縄文時代の住居跡は、直径3～4mの円形を基調とするものであり、尾根頂部の東斜面と稜線部東端に各2棟が分布している。後者の2棟には「コ」の字状の石囲炉があり、後期の住居跡と思われる。台形状の住居跡状遺構には炉や柱穴などはなく、埋土上位には縄文時代後期の土器片が多く含まれていた。

土坑は、直径0.8～1.5mの円形基調のものが多い。分布は、尾根頂部、稜線部、南斜面の順に多い。尾根頂部や稜線部の土坑は比較的規模が大きく、本来の断面形がフラスコ形のものが多い。また、稜線部の土坑には人為的に埋められたものがみられる。南斜面の土坑は規模も小さく、埋土も黒褐色土が主体である。弥生土器を伴う土坑が1基あり、小石が多く入った土器が出土した。

＜B区の出土遺物＞

出土遺物には、縄文土器、弥生土器、石器類がある。縄文土器には前期、中期、後期のものがあり、この中では後期初頭に位置づけられるものが多い。

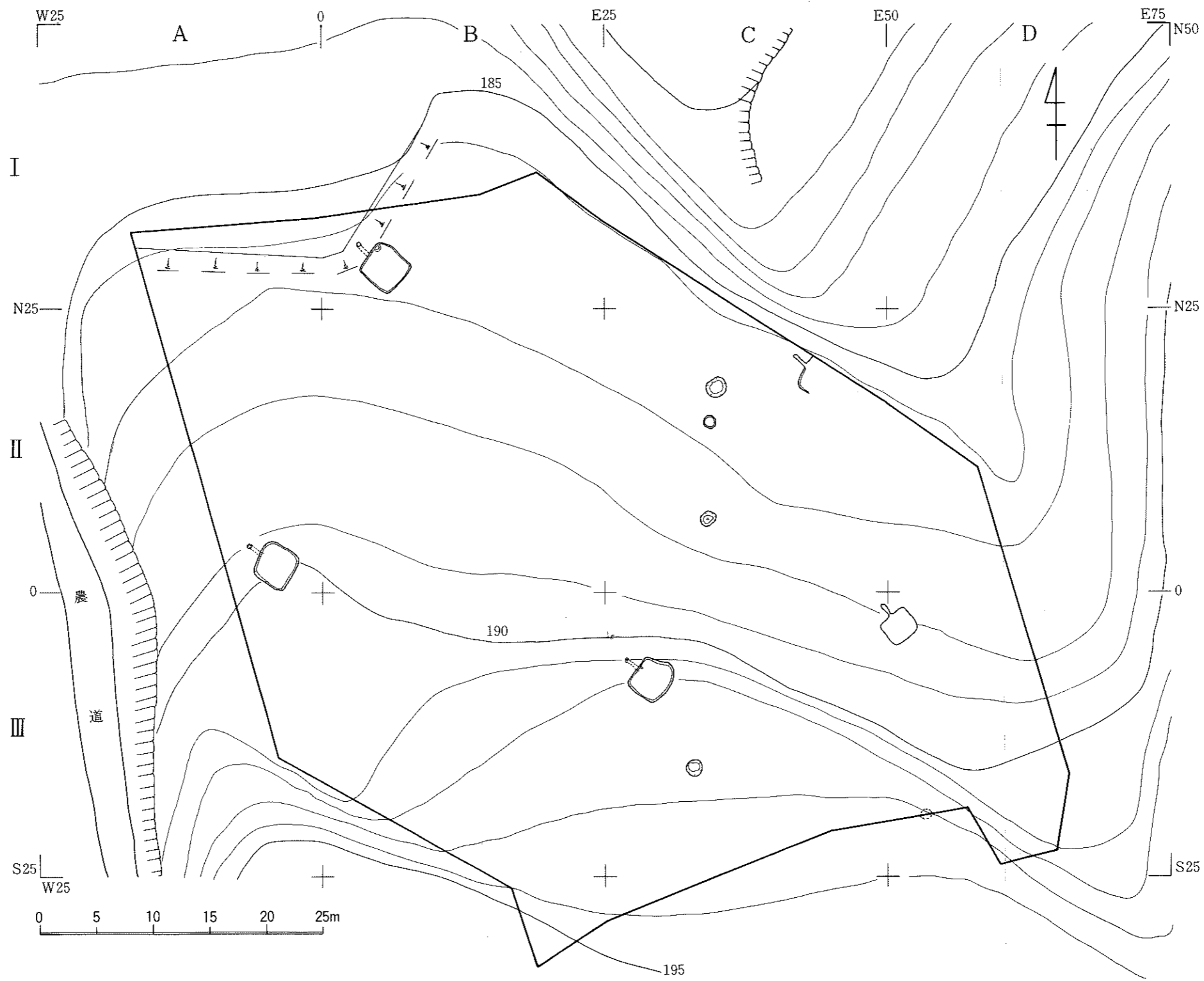
弥生土器は出土遺物の大半を占める。土器片をみると、地文は撚糸文または細い縄文で、これに綾絡文を組み合わせたものが多い。また、原体の回転方向を変えて羽状としたものもみられる。文様をもつものでは、交互刺突文や沈線による曲線文を口縁部に施しているものがある。これらの土器は、文様の特徴から弥生時代後期の土器群と考えられる。またアメリカ式石鏃が2点出土している。

3. まとめ

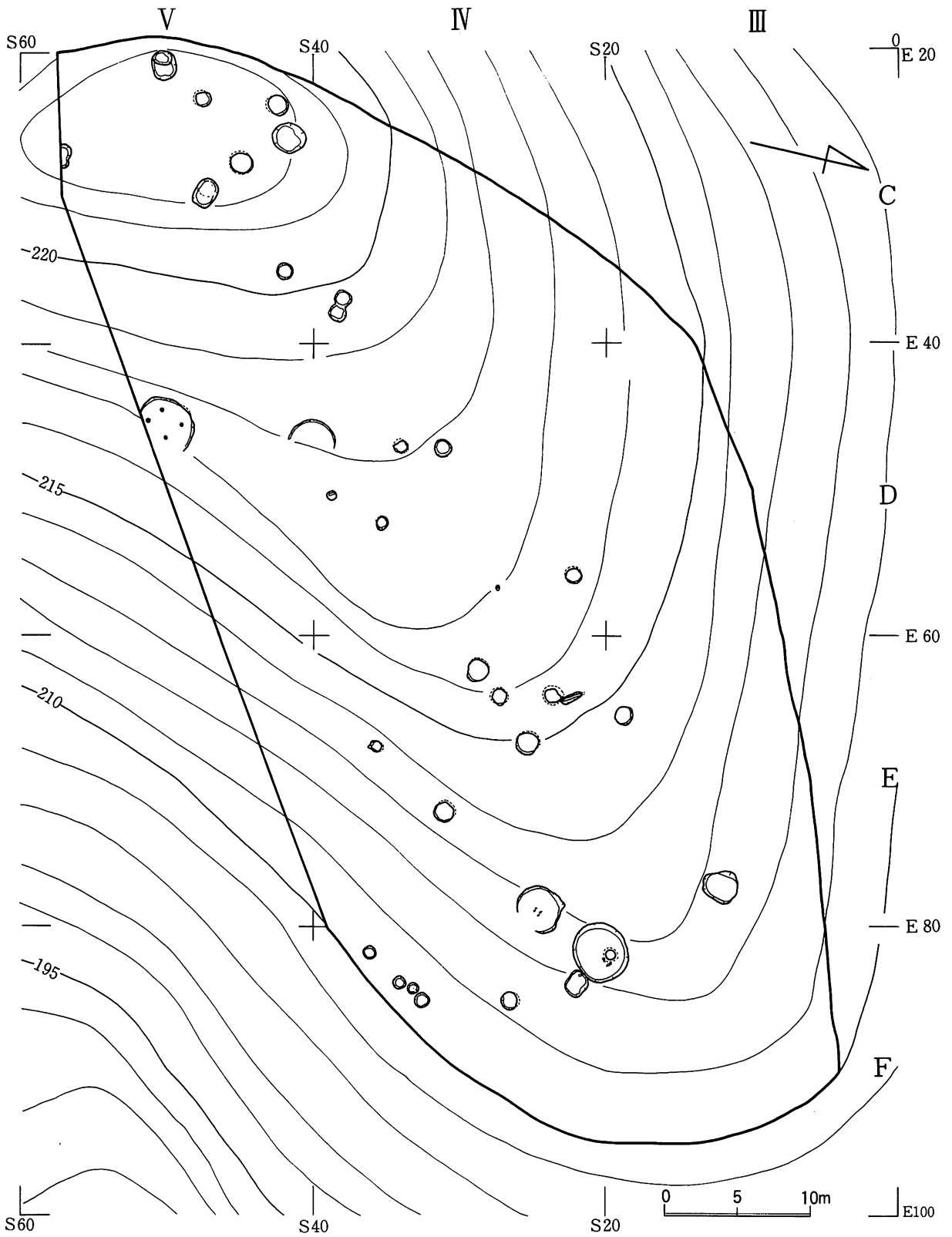
A区は分布調査によって縄文土器片が採集されたが、調査の結果平安時代の集落跡であることが明らかとなった。住居跡の床面付近が火山灰によって被われている点やすべて焼失した住居跡でカマドが破壊されている点など注目される資料が得られた。

B区は縄文時代の遺構や遺物の他に弥生時代の土器片が多く採集されたが、住居跡は判明せず、少数の土坑が検出された。しかし、弥生時代の居住空間の一部であることが明らかになった。

沢を隔てて東接する親久保Ⅲ遺跡からは縄文時代の土坑や陥し穴状遺構が多数発見されており、B区の住居跡や土坑群の分布を合わせて考えると占地の状況がより明確になり、調査区の南側に住居跡の存在が予想される。



親久保Ⅱ遺跡(A)遺構配置図



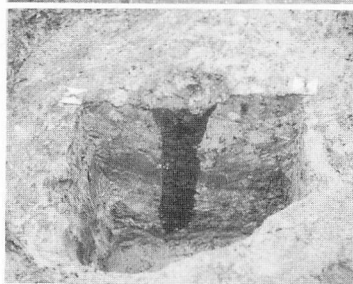
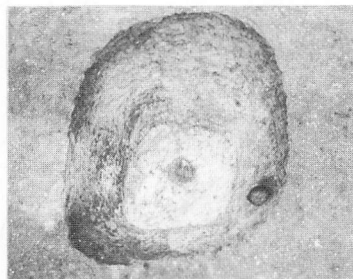
親久保Ⅱ遺跡(B)遺構配置図



遺跡全景



IV F 住居跡 (縄文)

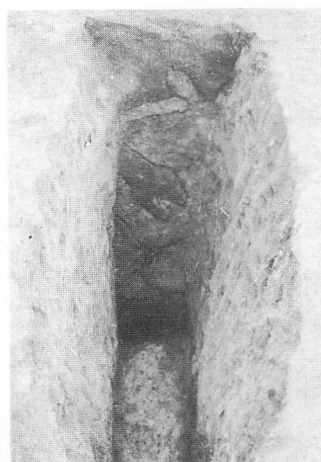
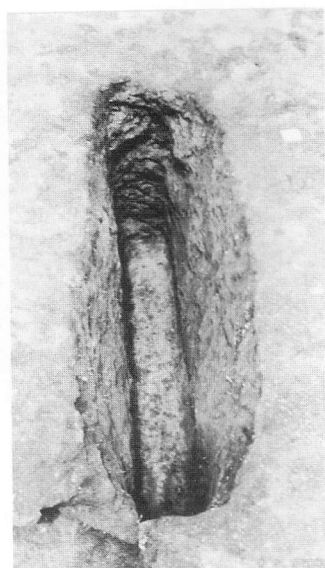


C II-3 土坑 (陥し穴)

写真図版16 親久保 II 遺跡遺構



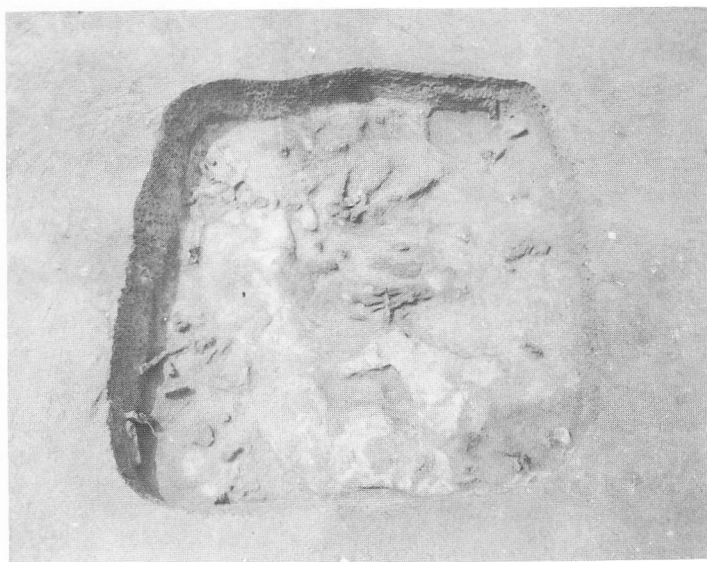
B I 住居跡（平安） 火山灰堆積状況



陥し穴状遺構



B I 住居跡 埋土断面



B I 住居跡 炭化材分布状況

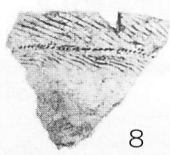
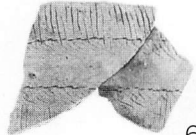
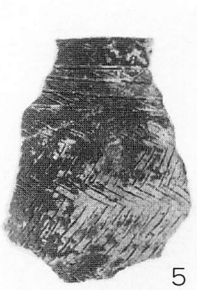
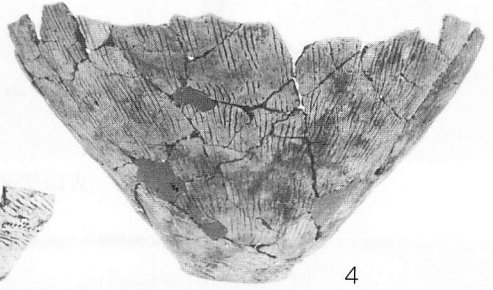


IV F-1 土坑（弥生）

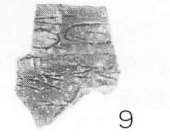
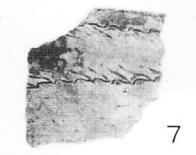
写真図版17 親久保II遺跡遺構



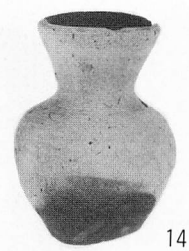
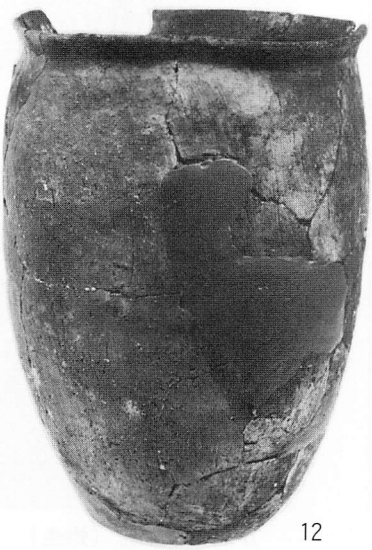
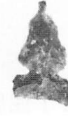
1~3 縄文土器



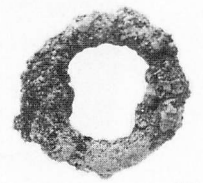
4~9 弥生土器



10・11 アメリカ式石鏃



12~14 土師器



15 鉄製品

写真図版18 親久保II遺跡出土遺物

(8) おやくほ 親久保 III 遺跡

所在地 二戸郡一戸町一戸字親久保149ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局 一戸工事事務所
発掘調査期間 昭和61年4月14日～6月15日
調査対象面積 8,220㎡
発掘調査面積 8,220㎡
遺跡番号・略号 JE19-1198・OKIII-86
調査担当者 中川重紀・光井文行
協力機関 一戸町教育委員会



親久保Ⅲ遺跡位置図

1. 遺跡の立地

親久保Ⅲ遺跡は、国鉄東北本線一戸駅から北西約2.5kmに位置する。国道4号からは町道八木沢線を1.9km経て八木沢公民館に至り、これより南東0.7kmに所在する。北約200mには北流する馬淵川が流れ、馬淵川の支流である龍頭川との合流点までは北東約300mである。

遺跡は七時雨山麓丘陵の北東端部にあたり、北流する馬淵川左岸の上位段丘相当面に立地する。標高は193～206m、馬淵川との比高は80m程である。

遺跡の現状は畑地であり、地形は調査区中央部の尾根を頂点としてほぼ同心円状に等高線をもつ緩斜面である。南側には現在でも僅かに流水のある沢を挟んで標高200m前後の丘陵地があり、東側は約300mで馬淵川の支流である龍頭川へと続いている。

2. 調査の概要

今年度の調査は、昨年度の粗掘調査結果をもとに精査を実施した。その結果、検出された遺構はいずれも縄文時代の遺構であり、土坑30基と陥し穴状遺構27基である。遺物は、火山灰の堆積が見られた調査区の西側に集中して出土した縄文土器がほとんどである。

<土坑>

検出された30基のうち1基は調査区域の東側に位置するが、他の29基は尾根頂部やその周辺に位置する。尾根部に位置する土坑群のうち、土坑間での重複関係にあるものが6基、陥し穴状遺構を切っているものが1基である。

検出面での平面形は円形状のものであり、断面形はフラスコ状22基、浅皿状6基、ビーカー状2基に分けられる。フラスコ状の土坑は検出面の径77～87cmが3基、径106～115cmが6基、径160～175cmが3基、径185～210cmが5基であるが、深さが22～102cmと一定していない。浅皿状の土坑では検出面の径90～134cmが5基、径195cmが1基であり、1基を除きほぼ同一の大きさであり、深さは7～19cmと浅いものである。ビーカー状の土坑は検出面で径220cm・深さ43cmのものと検出面で径120cm・深さ13cmのものである。これらの土坑には副穴をもつ土坑があり、各形状にそれぞれ1基ずつである。埋土はいずれも自然流入したものや、人為的に埋め戻されているもの等で構成されている。

出土遺物は埋土中より縄文時代前期、後期土器片や石鏃が少量出土しているだけである。

<陥し穴状遺構>

検出された27基の内訳は、平面形が溝状のもの24基、円形状のもの3基である。これら陥し穴状遺構の配置を見ると円形状のものは単独に検出されているが、溝状のものは等高線に直行しないし平行して検出され、調査区西側の小沢近くから尾根頂部を通して東側に向かって14基が並んで検出され、さらに、平行するように2ないし4基が1群となるように配置されている。

規模は円形状が検出面で径115～133cm、深さ58～80cm、溝状が検出面で長軸140～283cm、深

さ30～97cmであり、浅いものは上部が削られているためと考えられる。また、円形状のものはほぼ中央に逆茂木の穴と見られる小穴が見られる。

<遺物包含地>

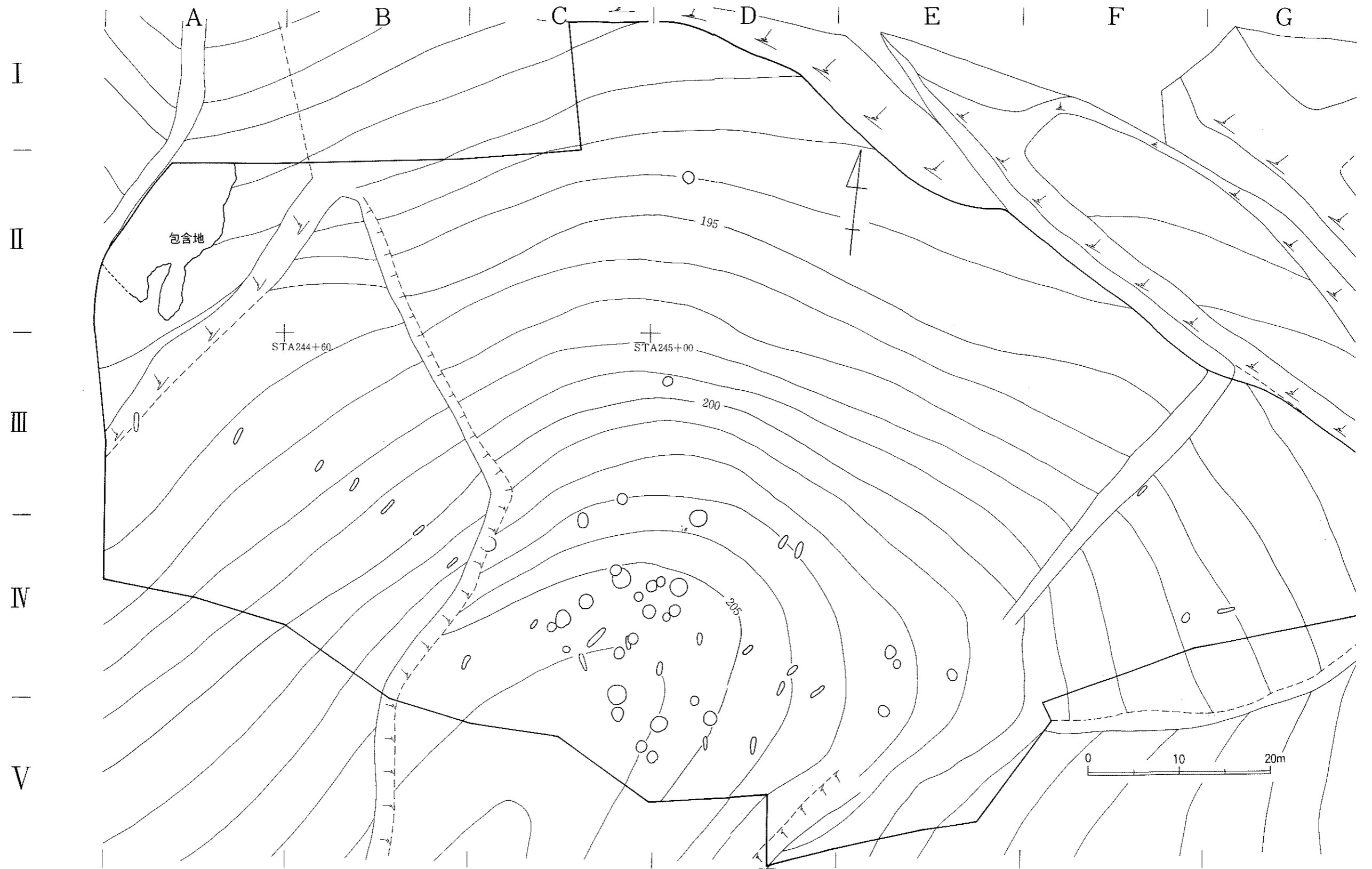
調査区の西側に見られた小沢沿いに平行する形で東西10m、南北17mの範囲に遺物が包含されており、さらに調査区域外の北側に延びていると思われるものである。この地区の上部には十和田 a 降下火山灰があり、その下位に縄文時代晩期の深鉢ほぼ1個体分が検出され、さらに下位には縄文時代後期の土器30数点が検出された。

<出土遺物>

遺構から検出された遺物は、縄文時代前期、後期の土器片数点と石鏃が数点検出されたにすぎず、大半は調査区の尾根部分から僅かに検出されている程度であり、土器、石器の出土は多くなかった。土器は縄文時代早期、前期、後期、晩期と弥生時代のものであり、その中で特に出土量の多い時期は先の遺物包含地から出土した後期の土器である。石器は石鏃、スクレイパー、凹石、敲石、磨石、円盤状石製品等が出土している。

3. まとめ

本遺跡は、地形的にみると丘陵の北端に位置しており、南側に丘陵地が続くことや土坑の検出状況からみて遺跡は調査区の南側に続いているものと考えられる。また住居跡が検出されていないが遺構や遺物の検出状況から、縄文時代には居住地や狩場として利用され、弥生時代には居住地として利用されていたと考えられ、調査区南側の尾根部分に住居跡の存在が考えられる。



親久保Ⅲ遺跡遺構配置図



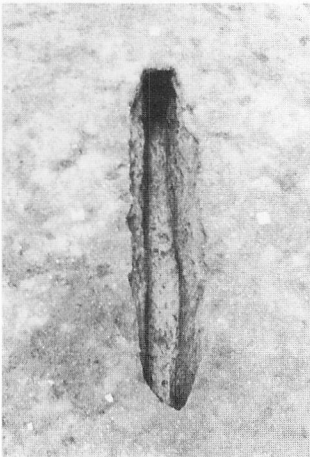
遺跡全景



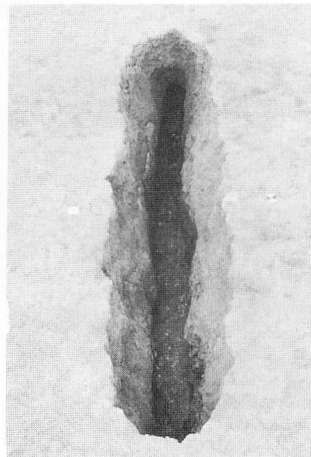
土坑



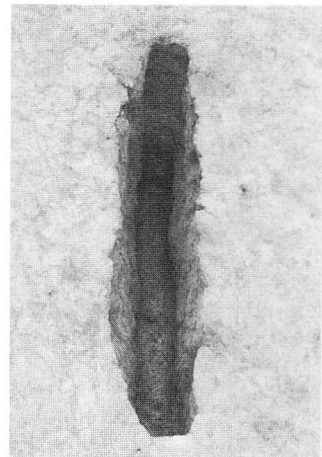
陥し穴状遺構



陥し穴状遺構

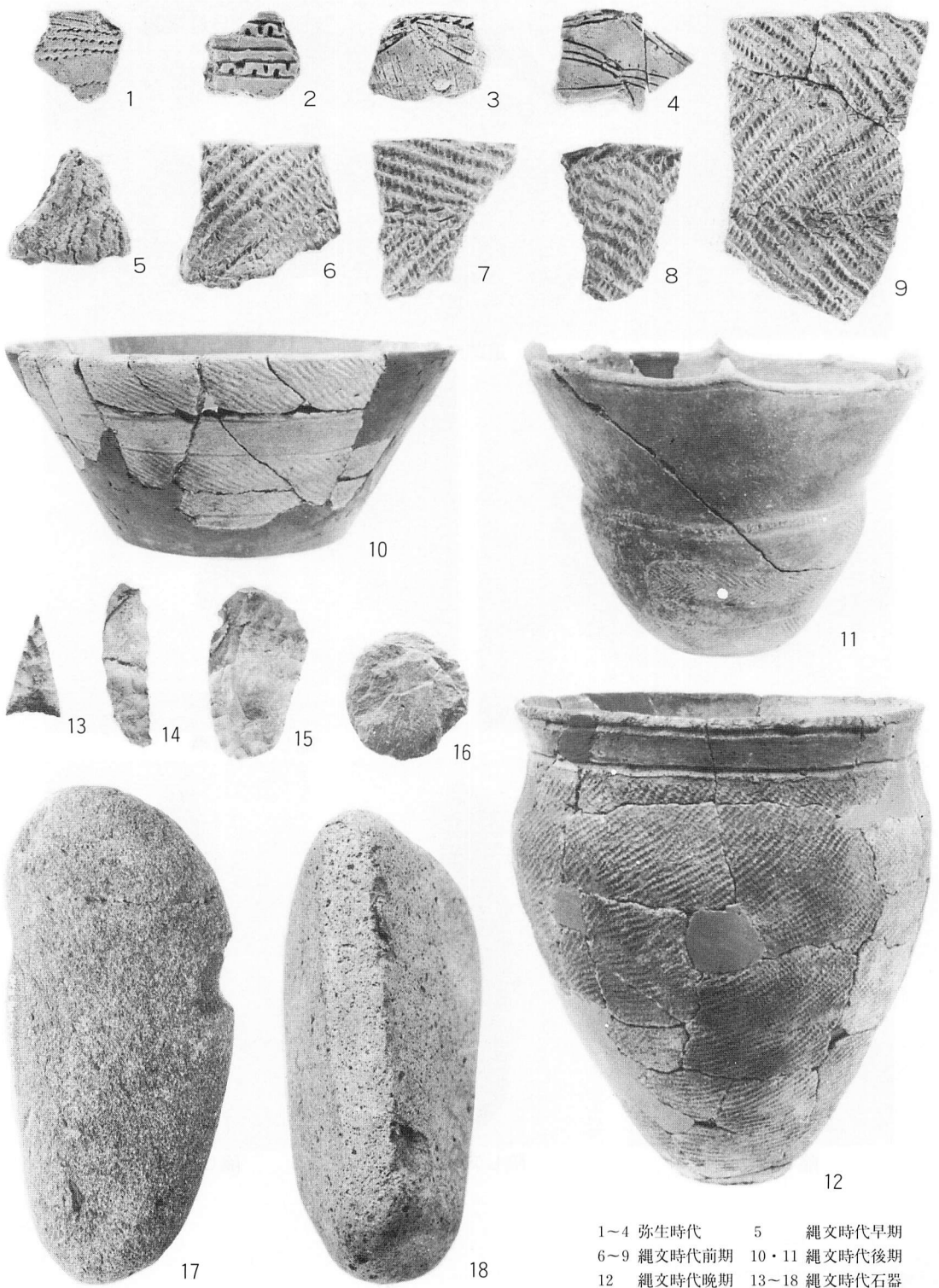


陥し穴状遺構



陥し穴状遺構

写真図版19 親久保Ⅲ遺跡遺構



写真図版20 親久保Ⅲ遺跡出土遺物

(9) おやくほ 親久保 IV 遺跡

所在地 二戸郡一戸町一戸字親久保146-2 ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局 一戸工事事務所
発掘調査期間 昭和61年6月14日～7月31日
調査対象面積 3,460㎡
発掘調査面積 3,460㎡
遺跡番号・略号 JE19-1199・OKIV-86
調査担当者 中川重紀・光井文行
協力機関 一戸町教育委員会



親久保IV遺跡位置図

1. 遺跡の立地

親久保Ⅳ遺跡は、国鉄東北本線一戸駅から北西へ約2.5kmに位置する。国道4号からは町道八木沢線を1.9km経て八木沢公民館に至り、これより南東0.8kmに所在する。

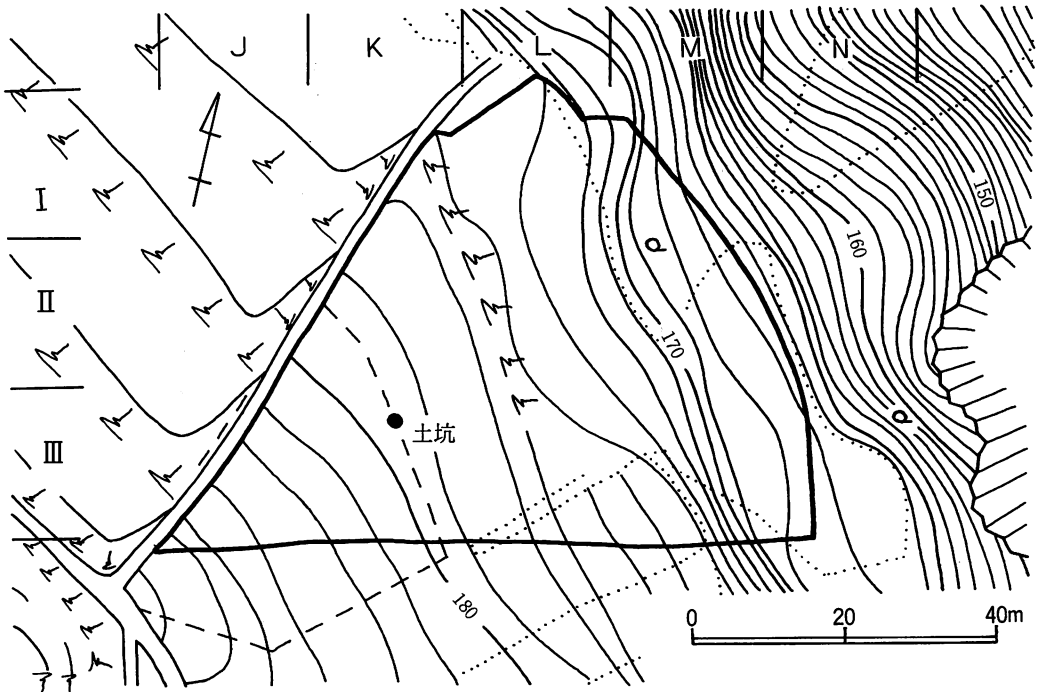
遺跡は七時兩山麓丘陵の北東端部の裾部分にあたり、北端部分では馬淵川に面して急峻な崖となっている。標高は165~185m、馬淵川との比高は約60mである。

2. 調査の概要

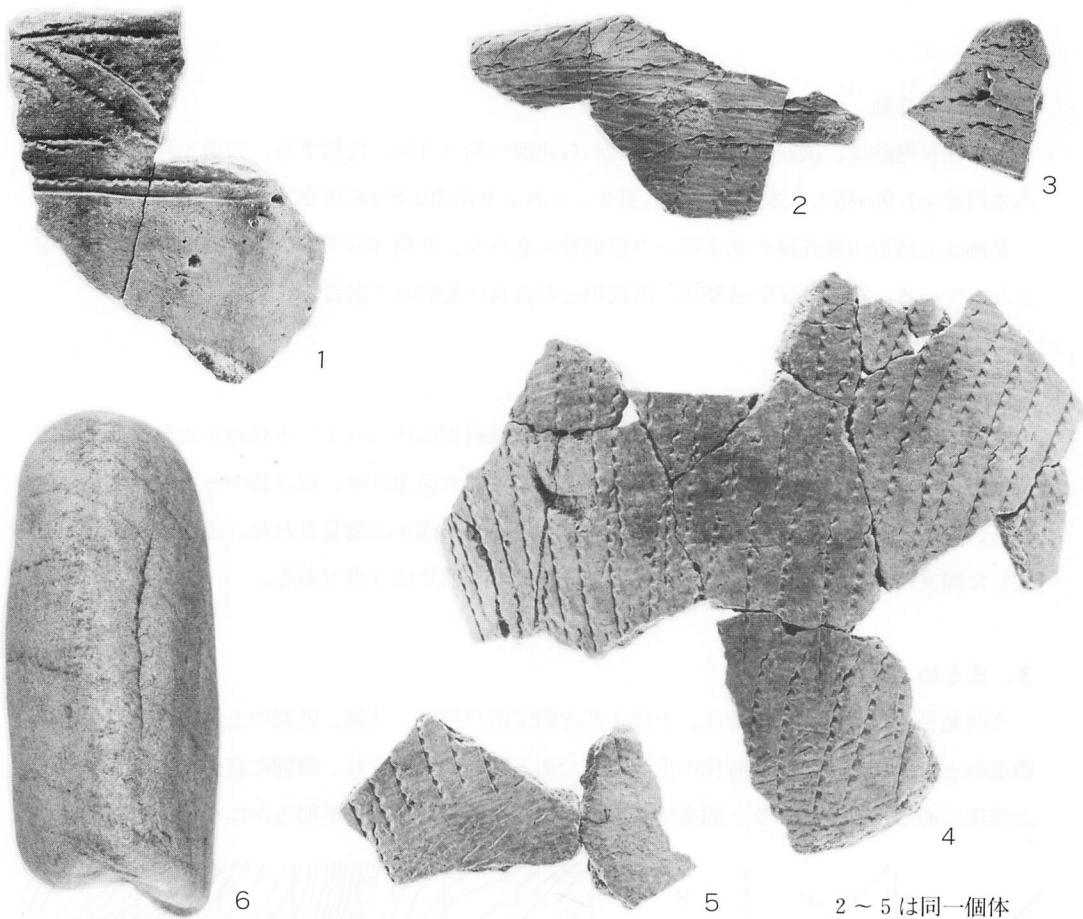
調査区域は1辺65~70mの扇状の範囲であり、緩斜面に作られている畑地を対象として実施したものである。発掘調査の結果、調査区はほぼ中央に直径100cm、深さ15cmの土坑が1基検出され、遺物は縄文時代早期、前期、晩期の土器や石器が僅かに発見された。土器は貝殻文を施した縄文時代早期の土器片が多く、前期と晩期の土器片は3点である。

3. まとめ

今回発見された遺構と遺物は、土坑1基と縄文時代早期、前期、晩期の土器数点である。遺構遺物とも少ないが、縄文時代の生活空間であることが確認され、西側に続く親久保Ⅲ遺跡の北端部である可能性があり、縄文時代早期からの遺跡であることが明らかになった。



親久保Ⅳ遺跡遺構配置図



2～5は同一個体



土坑平面



土坑断面

写真図版21 親久保IV遺跡遺構・出土遺物

IV 市 町 村 関 係

(1) 田中^{たなか}IV遺跡

所在地 久慈市夏井町字閉伊口6—64—37ほか
委託者 久慈市
発掘調査期間 昭和61年4月10日～5月30日
調査対象面積 2,400m²
発掘調査面積 2,400m²
遺跡番号・略号 JG10—2116・TNIV—86
調査担当者 玉川英喜・平井進
協力機関 久慈市教育委員会



田中IV遺跡位置図

1. 遺跡の立地

田中Ⅳ遺跡は、国鉄八戸線陸中夏井駅の北約1.6kmに位置する。国道45号の閉伊口からは市道半崎線を0.6km進み、これよりさらに北0.2kmに所在する。

遺跡は、閉伊口で夏井川に合流する鳥谷川左岸の丘陵の緩斜面及び平坦面上に立地し、南・東には標高50～80mの尾根が延び、北は西流する沢に限られる。調査地はその東寄りの一部である。標高は35～50m、鳥谷川との比高は25～40mである。

現況は松・杉の多い山林であるが、かつては畑地として利用されたことがある。

2. 調査の概要

発掘調査は、国家石油備蓄基地建設関連の道路新設に伴う緊急調査であり、調査区域は道路建設予定地に沿った幅10～25m、長さ約180mの範囲である。

調査の結果、陥し穴状遺構14基、ピット1基が検出された。遺構は調査区南西端の尾根から平坦地にかけての斜面上に集中している。

<陥し穴状遺構・ピット>

陥し穴状遺構の検出面における平面形は溝状のものと円形状のものがある。前者は13基検出され、その規模は長さ290～440cm、幅50～100cm、深さ40～120cmほどである。後者は1基のみで、規模は開口部径約135cm、底部径約95cm、深さ約60cmである。全体に浅い傾向にあるが、上層が黒褐色土のため検出面が下がっていることや上部の流失によるものと思われる。遺構に堆積した埋土は黒色土・黒褐色土が卓越するが、上部に褐色・黄褐色粘性土が流入する遺構もある。

ピットは調査区南西端の尾根の頂部付近で検出された。斜面下方の一部は削平されているが、平面形は円形、断面形はフラスコ形を呈する。規模は残存部で開口部径93×142cm、底部径103×142cm、深さ約30cmである。

<出土遺物>

遺物は、遺構の集中する付近の表土から縄文土器の鉢の底部破片1点と石鏃1点が出土した。そのほか、土師器片を含む摩滅した土器片6点が出土した。

3. まとめ

調査によって陥し穴状遺構を中心とした遺構が検出され、縄文時代の狩場跡であることが判明した。遺物の中に土師器片も少量あるが、それらに伴う遺構は確認されなかった。

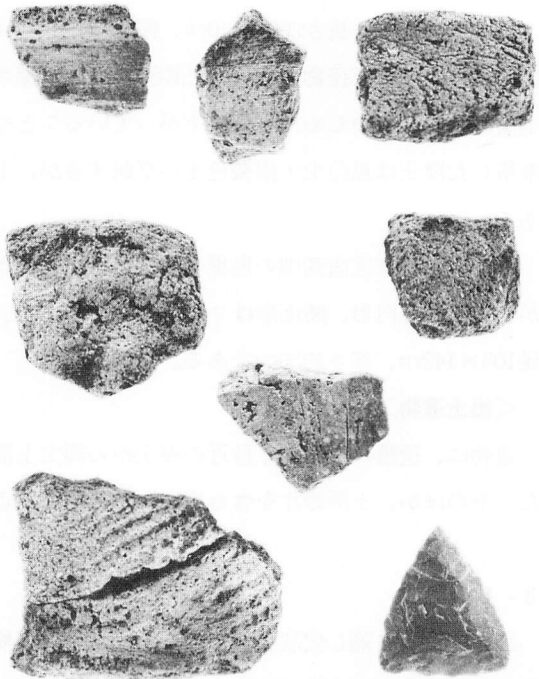
溝状の陥し穴状遺構は、長軸を東西または北西―南東方向にとるものが多い。斜面に対してほぼ平行するもの9基、直交するもの1基、45度位の角度をとるもの3基に分けられる。遺構はさらに調査区域外にも存在すると推測される。



遺跡近景（南から）



陥し穴状遺構



出土遺物

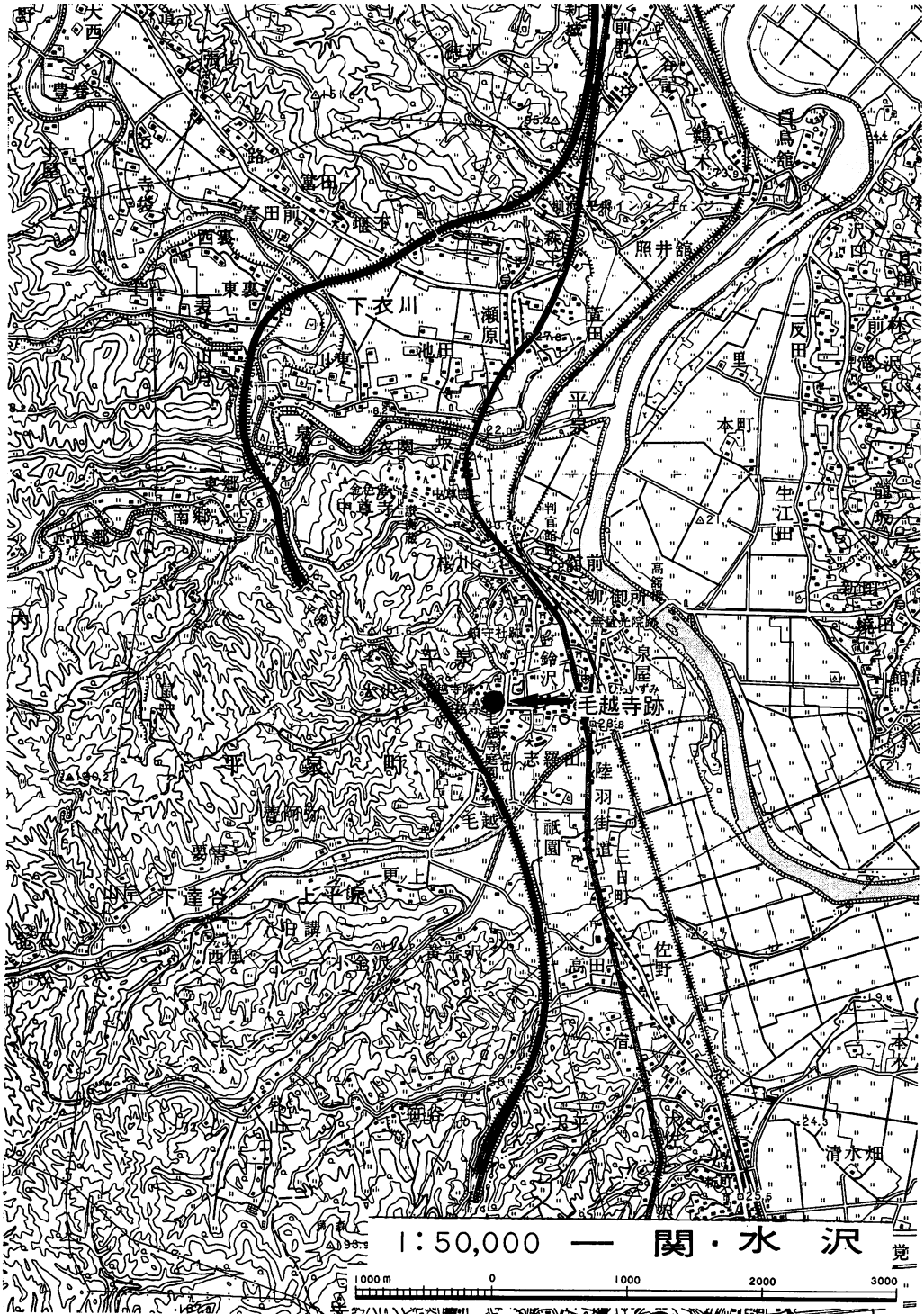


田中Ⅳ遺跡遺構配置図

V 法人關係

(1) 毛越寺跡

所在地 西磐井郡平泉町平泉字大沢58ほか
委託者 宗教法人天台宗別格本山毛越寺
発掘調査期間 昭和61年4月8日～5月31日
調査対象面積 700㎡
発掘調査面積 700㎡
遺跡番号・略号 NE76—1040・MT—86
調査担当者 高橋義介・菊池利和
協力機関 平泉町教育委員会



毛越寺跡位置図

1. 遺跡の立地

毛越寺跡は、国鉄東北本線平泉駅の西方0.8 kmに位置し、国道4号から主要地方道平泉殿美溪線を西進し、町道大沢線の起点となる北側に所在する。遺跡は北上川の西岸にあたり、その支流の太田川左岸に発達した低位段丘に立地している。南側には氾濫平野が広がり、遺跡との比高は5 mほどである。

調査地は現本堂の北側と西側にあたり、現状は昭和30年代まで使用された氷室跡を盛土整地した倉庫跡である。また、調査地の西側は昭和58年に平泉町教育委員会が調査した石敷遺構に隣接している。標高は35 m～37 m前後である。

2. 調査の概要

今回の調査は、天台宗別格本山毛越寺の本堂改築に伴うもので、700 m²を対象に実施したものである。

検出された遺構は、石敷遺構と溝跡1条であり、ほかに氷室跡がある。

<石敷遺跡>

石敷遺構は、調査区北側の全域から検出され、その範囲は約250 m²に及んでいる。径1 cm～10 cm大の川原石が単層をなして敷設されており、全体に径2 cm～5 cm大のものが主体を占めている。南側の半分以上は氷室によって既に破壊されており、範囲の限界は不詳である。石敷面は、一部で木根等による攪乱のため欠落するものの、径5 cmほどの石が密に敷設された面や径10 cm前後の石が集合する箇所が認められる。それらの性格については明確ではない。

<溝跡>

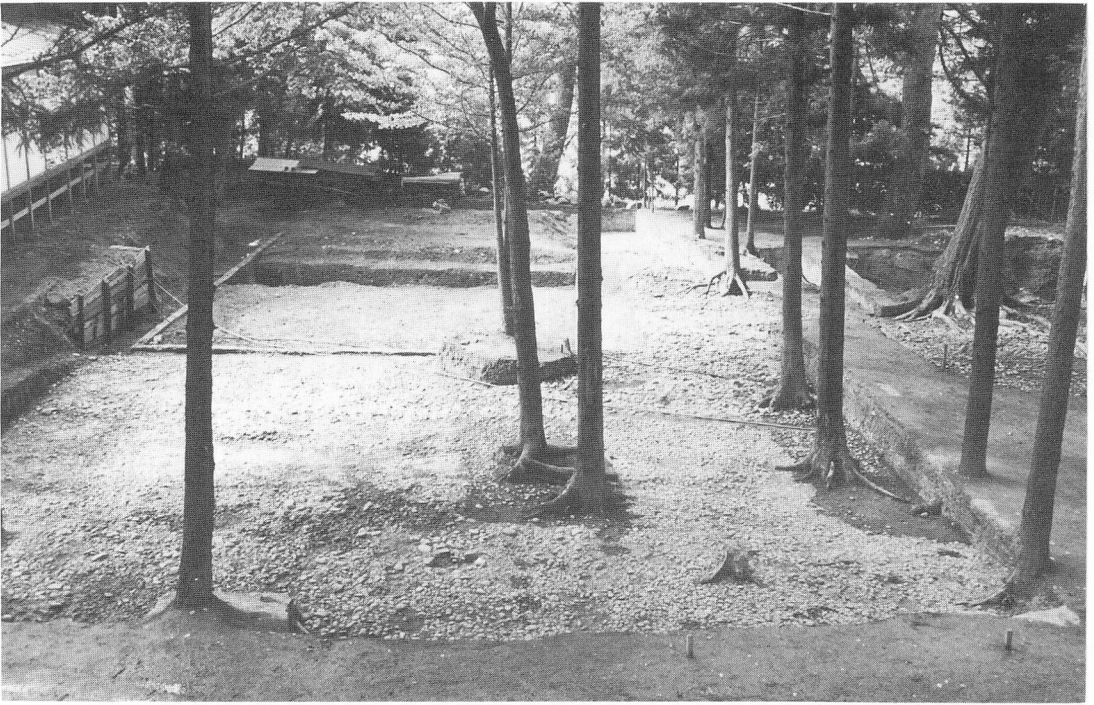
溝跡は南端部で検出され、上幅2 mほどで東西方向に延びているが氷室で大部分が削平を受けている。横断面形は葉研状を呈しており、埋土下位に径7 cm～8 cmの亜角礫が多く混入している。

<出土遺物>

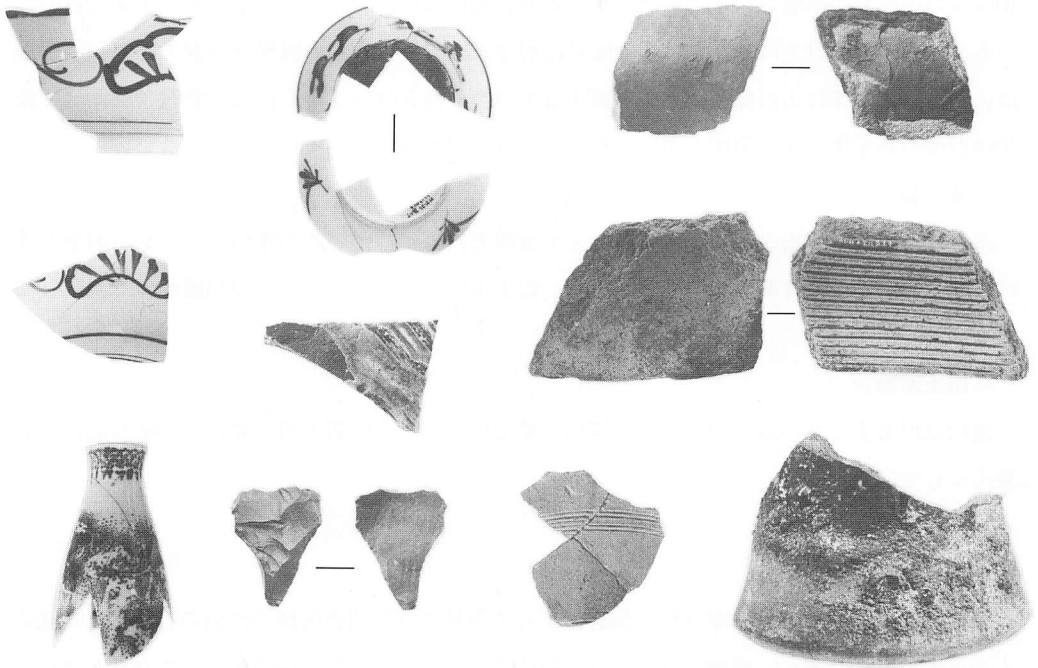
遺物は旧表土上面の盛土および氷室の盛土整地層から、土師質土器と最近の陶磁器破片が少量出土している。

3. まとめ

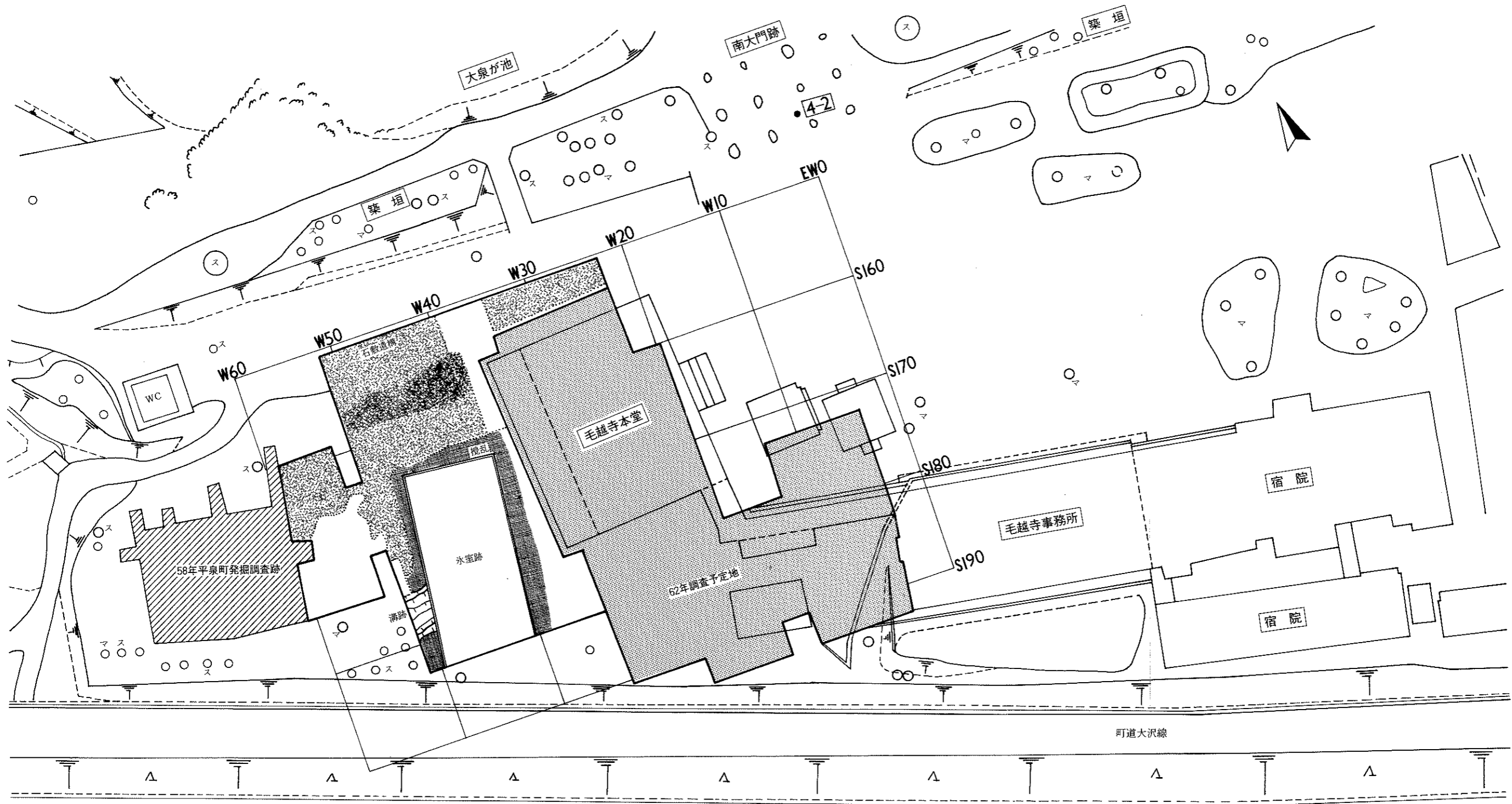
石敷遺構は、昭和58年に平泉町の調査によって発見された調査区域の西側の石敷面と一連のものと思われる。また、南側は既に氷室で破壊されているが南端の溝跡付近まで存在していたことが推測され、築垣の外側に敷設された石敷の一部と考えられる。



石敷遺構（北側から）



写真図版23 毛越寺跡石敷遺構・出土遺物



毛越寺跡遺構配置図

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 及 川 昌 二
副 所 長 宮 英 一

〔管理課〕

課 長 千 葉 久 夫
課長補佐 阿 部 詔 夫
主 事 立 花 多加志
運 転 技 士 佐 藤 春 男
兼 技 能 員

〔調査課〕

課 長 昆 野 靖
主任文化財 工 藤 利 幸
専門調査員
〃 高 橋 与右エ門
文 化 財 菊 池 利 和
専門調査員
〃 渡 辺 洋 一
〃 田 鎖 寿 夫
〃 佐々木 嘉 直
〃 平 井 進
〃 中 村 良 一
〃 田 村 壮 一

文 化 財
専門調査員

光 井 文 行
玉 川 英 喜
石 川 長 喜
中 川 重 紀
高 橋 義 介
酒 井 宗 孝

〔資料課〕

課 長 名 須 川 溢 男
主任文化財 三 浦 謙 一
専門調査員
文 化 財 佐々木 清 文
専門調査員

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第115集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(昭和61年度分)

昭和62年2月25日 印刷

昭和62年2月28日 発行

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 紫波郡都南村大字下飯岡11字高屋敷185
電話 (0196) 38—9001～2

印刷 株式会社 富士屋印刷所
〒020 盛岡市下ノ橋町2番9号
電話 (0196) 23—6391

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1987